

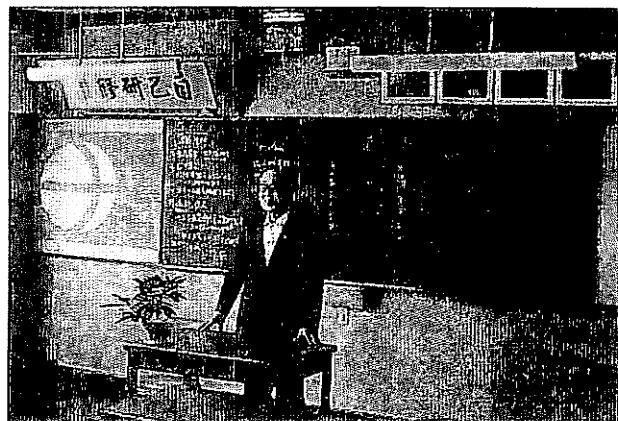
# 追悼の部



清水 悟郎 先生



— 作品から —



最後の花期を守るはトウヤクリントウ

烈風に乗つて木の葉のように

自在に遠く飛ひ去つたはミヤマオソホンカ

龍界りぞ開きまだえがり

近くまた遠く見えかくれすなほ

虎島の白馬・名だたる歎

あれか薬師・あれか水曜

かくも勿体ない天の饗宴にあらがつて

われら二人岩角を踏みしめて空にねさんやうの一時

ああ・すべて現つ・すべて幻

たを靈感をもつて思ひがるベキ精神の標高点

この境にあつて何のことばぞ

今は、はや

来し方とてあら木、行く木とてあら木

妻とてあら木、女性とてあら木

あなたまた人間ひとりで

まあもししばらく立つておいでなさい

## 絶巔にて

一歩をいむなして、一いに針、木板上に立つ。三十年来の  
宿願を果たしたるなり。一

黙つてしばらく立つておいでなさい

今こそ何も言うことのできない沈黙の時間

何を吉つてもいけない沉默の時間

感激と喜びとが胸の穴舌

沉默がすへてど轟き瞬間

守るべき沉默の責い一時なので

ああ、不笑なる丈よりすと互に自責しながら

わたしはほれいまゆに一人山へとせり

あなたは度よしく當守を守り

今どうどう三十年來の宿願と約束を果たして  
折しも秋の気配日に日に兆して

屋根路をたどる人影も見えた時

愛する人と二人だけで立つ岳へ絶巔

峯にかけた今日までの長い年月を思えば

大どえ風雨にたたかれようと暗雲に包まれよつて  
どうして急いで下れましょう

じらんませい

霧に濡れながら遠く

山柳沢文進君

劍岳と瀧川の峻厳、莊嚴なる岩の巖堂に急ぎ参じ  
尽拙折しこも心向いする暗雲に見えかくれする  
さる名残を惜しきる告別の詩を擧げて

さるにても美わしきは友達のザイルよ  
さるが天意のごとく固く結ばれ  
そのままで遠に結ばれずあつたそのザイルに  
相携えて昇天し行くとは：

わ  
と君か学山む君心れ  
もら弱友のつらと心を  
にがきた仲まをいつけ  
山愛肉体に幼な友だち  
に愛しにうる劍に正対し  
れつ在しりし日を偲ぶ  
君心れらまた、見えざるザイル  
はさらしみ育てたる父、母、兄、弟、妹  
に語り交わしてたる父、母、兄、弟、妹  
にうちつままで題せ參じ

まこと幸いなるか  
山ふところ深く抱かれながら  
見ゆるザイルよりも強く長きザイルも  
ちる日もなく人の心に繋ぎとめらるる

山世再自きそあ遭な静安  
のび然びのあ体だからか  
木親同のしまよ深く落られ、一心同体なる二人  
魂をじまくもしくはさらに埋るうず高き岩石に  
劍の岩角と化して骨片とならん  
悲運を重ねて骨片とならん  
無し言めの教訓を重ねて骨片とならん  
の教訓を重ねて骨片とならん  
の教訓を重ねて骨片とならん

兩君の靈に擧げたるこの「鎮魂のう」  
未定稿のまながら一般学生に贈るた  
へ三九九一

# 鎌魂のうた

柳沢 進  
山形文武  
兩君の靈に擧げる

昭和三九年八月二三日、兩君劍池の谷中央ドーム横にて隕死、遺体一度発見されたるも一四号台風による山崩れのため埋没発見できず、眞身は○日、劍沢にて合同慰靈祭を行なう。教誨隊指揮で深く哀を感じつつ

清水悟郎

ああ強烈なるザイルよ  
ああ木刃なす剣西面の岩角も  
ああ木魂しつつ轟き落ちる中央ドーム稜の落石も  
ああ堅固なるザイルよ、そのノットよ  
ああ白みいぐ三の窓のキヤンブを出るその時から  
ああそり立つ池の谷中央壁の岩壁をよじる時も  
ああ遠いテラスに身を横たえていたと  
ああ永遠の眠かりにつくその時までも  
ああついに解かれることなく  
ああ固く結ばれていたといふのか

文進

あつゝ望す若武  
な虛空あいみの  
す殿堂枕を並べて  
岩にしきに  
あつゝみかはふさ  
に生い育ちつ  
て今拒絶する  
あつゝ多かるべき  
にひとし  
が清淨なる山  
が清淨なる山  
の日を  
の日を  
みかはふさ  
わしくくましく  
よき青春の日々を  
ひとし  
めくらはる  
を至つて  
が命と挫けざる  
が命と挫けざる  
か空しくあげ  
か空しくあげ  
ふくらうものぞ  
のふくらうものぞ  
ふくらうものぞ

愛そ人成必流  
成こ激一人そさむ予成人ま悲一穂山とのが敗  
敗こしすののはし測功生こし山高の意純傾はの  
誰にくじじ子中れらしはは必滅  
れが命と燃が命と燃  
に至つてまつてまつてま  
か空しくあげ  
か空しくあげ  
ふくらうものぞ  
ふくらうものぞ  
ふくらうものぞ

ああ強烈なるザイルよ  
ああ木刃なす剣西面の岩角も  
ああ木魂しつつ轟き落ちる中央ドーム稜の落石も  
ああ堅固なるザイルよ、そのノットよ  
ああ白みいぐ三の窓のキヤンブを出るその時から  
ああそり立つ池の谷中央壁の岩壁をよじる時も  
ああ遠いテラスに身を横たえていたと  
ああ永遠の眠かりにつくその時までも  
ああついに解かれることなく  
ああ固く結ばれていたといふのか



ナは江、山石に咲きつぶ花を纏へ、  
われらすてに友たるき持つた。

約せよレマーレの日が山頂に会し、  
ハと言ひ交わさず、名も明かず、  
そのまゝ遠く別れ去るゝとま、

アヒに顔をほ見知らず終わるゝと、  
ああ、われう今日の日よりレバ・

オソニ路傍の人はない。

### 聖なる山の裸身像

高村光太郎先生の御靈廟に献する

ああ 聖なる山の裸身像、

嵐の中にも黙然と御立つてすむのよ、

あのすからにレでここに生きまづり、

ありすからにレでここに年老ひ、

虔ましく年輪を刻みつづけ、

ついに一步をも動かず、

今、巣をかく神さひて、

みあからぬ裸形と深い渓谷に刻みつゝ、

梢はるかに雪の涙泉を凌いで立ちつくす、

空も林も古までも、

ものみな騒然と立つか嵐の中に、

見よ、ひと端然と身を正し、

神妙を誇るが、沈黙の大菩薩。

立ち枯れて御身縛の木よ、  
幹も枝も搖れず身じろがず、

静かに眼を開て、

悲れハ未還の反らの冥冥を、

レヒと想い起しておひだ。

猛「狂はねやうの中だ、  
フハ狂イ巖然と突立つていろ  
御身・立ち枯れて樹の大木よ。  
生木の枝が横さまに千切れ散ふ、  
流れは僕篠山ふくらんで苔を歯玉、  
落石は雷のように激しく岳底に瓦礫す、  
折れた支柱を手にして逃げ走るキヤンバ、  
生れるのみなおののいて息を呑まなかば、

# 標 高 無

一人一人の登山史、精神史

八四・七・二九(日)  
県山岳会セントラル山講習会  
清水悟郎

## 未知の山友に

駒草は千島桔梗よ山に咲く汝が命を死なれ玉なゆめ

氷雨降る一方天の毛根にレマ咲キフク花の命を恩ふ

山小屋の長雨の滞在、そのつれづれに、  
画用紙に書いて張りておいた、  
こんな山日記の即興の歌が目にとまった。  
どこで、どうして出来た歌か、

それを知りせてよこせと言われたる  
なるほど、けれどそれよりさきに、  
こんな無い歌に目をとめられて、  
名前と住所をさぐり乍レ、

手紙をこまじよと書いてくれたあなたに、  
歌って手紙は玉のへたとい。  
その日、連華の山行だ。

駒草の群落に足をとどめ、

靈感にうなれて小屋に泊もう、  
この歌は山童の呼ぶ声を聞かれたと言われる。

また邊モレ年山の北岳の山行に、  
自然這前の相を觀じてと書かれるあなたより  
さうは拙き歌がいつどこで出来たかと、  
それを聞いてなんとかねえが。

まことに氷雨降りしきる山廻り、  
か物レとも見える命をさぐりながら、

イワツメガサヤケウメハチノウ、  
タテヤマリンドウカラクモヌクサ、  
何十何百という花の花が、  
人間の世紀にはるか先んじて、

咲キツモ咲キツモ、岩を彩るその天井、  
ところの毛根路をたどろうとも、  
花はわれうき呼びがあるとはないが。

ヒ マ ア ラ ヤ

短歌八首

ヒマアラヤすなわち雪の山とのみその名草  
純ドレミ巣レ美夫レ

名を聞くに無名峰とやナシあうはあれ天を  
つくがき立アヤヒマアラヤ

遠き世の大キ聖ヒマアラヤを仰ぎ見に  
サキ嘆き見にけど

みなもとは氷河か木はベンガルか遠々と  
流れ行く河

同じ星仰きつ夜を重ねコレ少年シルハ。

われを父と呼ぶはや

君僕ホケルンは風に因ひきう命たは

易く死なレモベガラス

高山蝶国境多根を飛び去りて風雨  
にわかに強からんとす

岩に咲く花に安可ソヒ花の名を聞く  
处女の声をすむレム

結び「山かそこにあるから」

※雪の頂よ、お前こそは己れを高まへリナヒ上  
て呉れる恋へた、そして断えず便打と呉れる  
教育者だ。模有恒山行

※われわれは山が好きだから愛るのだ。マリーも  
同様な気持ちから Because it's there と答えた  
んだ。トーハント「エジソンと電気」

※わが山々へ、そのせいかし道場から、わが青  
春が学びとつた、私の幸せに村れて、限りなし  
感謝をこめてホナシテイ「わが山々へ」舞

※ へさ山へ、その前に一

## 山頂の火矢

おたレドでさるには驚きをもつて見る  
ひと見る喜びに鼓舞されで、さうによく  
思ふよどすること。毛曉喜ハ

星がそし森に流れるのですか。  
うん、あうれのめづに飛んでくる。  
みみをなが、夜静まつた真夜中に、  
そして音か、音かほんとにするんですか。

みんなに聞こえなかつたり、

見えなかつたりするだけナ。

星が出す、どこかの山小屋の夜のとど。

一夜同宿の誰れ彼れに、

あの時話したは獅子座の流星群のこと、  
薪火回んで君エソフと聞いてとか。

笑すへキ君、石キ岳へよ。  
あなたとわだれとは、そう言えは……

赤岳の巻き降りて風を交わし、  
だれか雷鳴鳥沢では道をやヰり合ひ、

君はその時わだれの白髪を見覚えた、  
わたしは君のこい眉を見覚えた、

シメを交わすは今日が初めて。

こうして同じア豪行のバスに乗へ令わせねば、  
胸の音に大喜びにためておいた内緒のメテ、

たからいながら尋ねるが流星のニセ、

深夜の山頂の神社へアーテとは……

ああ清々レヨ老齋よ、わが友よ、

万葉深き日ぐれうど、

風さえ沈黙を守るとき、

はるかなる氣の風の奥での星雲かう、

岳神の祭壇にけぞゑ立せよどべか、

聖なる火矢が、

山頂自がナマ夜空をながむんじくるのだ。

さうは反よ、金新たに山へと赴け。

また見ゆものを見ゆとなれば、

烈風に乘つて雪煙を飛ぶ事無あり、

岩壁一に冰雪を凌いで香る花あり、  
山まだいふいよ嚴かに虚空にそそぐ、

谷まだいよい深く奈良落丁跡あり、

君一この事、固く銘記せよ一

君が今日の青春の日よりて、  
ついに一つの山を極め尽くせぬ。

この雪渓の下に毛圓い薔薇が咲いてあります。

夫につづくあやこへと、

雷鳥は這松の下で卵を抱きあたため、  
かしレカはち蔭で乳をふくませ、

遠く、陰れく、歛しハ彼方山嶺へと、  
ゑせに切なく心よ、かくちこがれるのか。

高山蝶は国境巻紋を越えて飛んで、  
夜はまだ夜、

あそび人界を隔砲レテ、

カシオペア・白鳥座は巔上に粲然と輝キ……

自鳥・鶴・鳩・鷹・鷹見・壁、

ああ、されば友人々、友人々、

果てはセントフラン、マッターホルン、

大自然の、宇宙の、銀河系の大聖母宝。

登る術無き幻の山々へまで……

科学文明、都會文化の時代を進んでも、  
山想う人は減りも無くなリモレません。

何たる無用のモノローグ、

それらの人は友人々とも同志、

自鳥にじと聞うのが、今さら愚かにもお前よ、

固木りまたあなたとの縁深き友、

こうぞ思ひつけてくぐさば、

あなたのお多い未知の友うき。

花咲く岩岡へとだどり着いて、

ハウホリ難念に足を停めるとは……

お前の孤独と絶対、

精神と肉体の極限が試みられようとする時、  
さらばさつきはうと計算を捨て、

むしろふさわしき、険峻なるこの道をほ、

今こそわれとわか身にむちうちながら、  
確かに踏みしめて行かねばならぬ。

ある日、岩稜にて

貴いのは見られたまではない、  
それを見いたれ、見いたさうと  
す。あなたが眼をレニモ貴い、  
オ。ジイド、地を糧レ

山の鎮魂歌

百瀬慎太郎大人の御靈に

山を想えば人恋いレ  
人を想えば山恋いレ

ああ山恋うる人を出迎えまた見送りつゝ、  
御鬼が孤獨の魂の中に生涯静かに燃え続けた、  
山小屋の篝火ひよろに温かく身にしみて  
香づがしく忘れかたい言葉はよ。

その言葉辭涼々否人皆の胸深く刻まれて、  
ごらんくださへ、そへ詔レのようへ、  
あなたが夏冬何百回ともなく踏まれて、  
下には大沢小屋、上には山の小屋、  
足跡が今もそこそこに残つてゐる針木大雪渓に、  
あなたを偲んでは山想い、人恋いながら、  
友人・夫婦・親子語らフマ、また一人で、  
國い約束のふうは方々から集つて来ています。

それと雪渓を見上げ、山をば仰ぎながら、  
ナフとみんな言い知れぬ魂の満足にいたつて、  
よし来年も再来年生じて誓つマリのです。

慎太郎大人よ、そうではありませんか、

山は永遠の山、聖なる殿堂、

登山とは魂そこへと憧れて、

一步また一步、高みへ、頂上へと、

わが身やが魂を励まレつ登り行くこと、  
そレく天地と合体する恩いに滿足する」と、  
目的の自体、何の功利ハ打算が五りましよウや！

わういほきで歩いて来た音なづがれ、いはゆる  
いフレが旧道となり発道となり、  
バスモ車も途中までは来りますが、  
「北より金木峠道」、一步山道へと入ルが、  
夜笠草、いわががみ・白根あわいは、  
残雪のほどりに既に花咲かせてわれらを迎え、

走る路の岩間にぬ草・りんどう・ラヨ雪草、

ああ、この一瞬こそは永遠だ。  
万象黙って声無く、  
神が啓示を垂れたりも一瞬だ。

見よ、魯班造った最後の、

白い絹の幕かと見えた細い雪淡き、  
刻々と黒く染まい行けば、

すゑにして金星もまたたき始め、  
夜更けでは今宵また、

デネブ・カペラ・アルデバラン、

銀河の流域に突然と行きとまし、  
鎮まる御身、銀、

ナヌカラにて御父の聖壇を照らすであろう、

誰かが山に登る所を教えてくれたのか、  
誰かが聖書を説くことを教えてくれたのか、  
何かわたらしを山に登らせるのか、  
何かわたらしを聖書に親しませるのか。

ここに岩場で喘ぐ子で、

つゝや考へて身みなかつたこといか、  
考へたとて思ひだせませしほうに、  
やつぱり考へてもみるに及ばないことだつたのか。

それは生まぬ汝ナキからアフリオリ、  
人されば死ぬまでカルルレン、  
人と生まぬ汝ナキソノ因果の旋のうに、

虚空を凌ぐ山へと思ひは燃えださう、  
なにを知らぬ少年の日から、  
忍苦に歡喜を伴なつて山行か続けられた。

せわわらい日々のなりわいかされを妨げよう、  
肉体からつかまつたされば、耐えながうと、  
その片隅に魂が燃えたり、限りある日まで、  
来る年もまた六る年も、  
五万の地圖をひうぐるべらう。

自然の大書籍なり人にありて  
書籍は聖書、地に在りて力書  
藉は爾にあら不や。水鳥鳥水

## 山行全上

見よ、高山環が風に舞つて飛んで行くゝを。  
テングルマが身ぐるわせて咲いているのを。  
さらばそつくり太古、原始の人間のようだ、  
進続へ、頑強に、黙々と登つて行かねばならぬ。

一步、一步、また一呼吸、一呼吸、

道はただこの一筋、

汚れ知らぬそな高みへと近づけば、  
静まる永遠、巖をかな無窮、

東初の風景の汚れ知らぬせ性！

こ水をお前に課せられた天路里程、

もう立交、たじうぐす、  
十歩を数え不して夫邊アツヅかある、虚空がある、

神秘の扉が開かれろ、

ああまたお前の生命の開闢がある。

### 金岳に寄せるオード

袖は、目に見えぬごとき、目に見え  
るものの中へ現わした。パスカル

天地のまゝただ中に、

ただ一人、全くただ一人、凝然といふ、  
静まる黄昏のこの一時、

金岳の岩に倚つて仰わはす、

心は、

何を思ひ不、何を憂ひ不、何を願ひ不、  
ただ清らかなるもと、遙かなるもとへの恩慕が、  
澄んだ浄の象からくまよに湧いて来るから、  
一切が透明な統一となり、純粹となる、

ああ 御身金よ、鑄金の想像よ、

赤々と燃える夕焼の空を遙く光輝とし、  
逆光がじそかに力が眼に射注ぐ。

名にレ負う黒部の奈落の谷は、

今レ沈々と沈み行く夜霧の床か。

やまとをさ平安か、

天に、地に、人に充ち満つる一瞬、

風わ木端然と襟を正し、

何者に對してとか、頭を垂れて、かがむ無事の祈禱、

## 追悼

### 清水悟郎先生の事など

百瀬 斐敏

清水先生のことを書こうとすると、なんともしんどい気分になってくる。どうしてなんだろう。いつだったか、田島守さんにお会いした時に、「清水先生の作品などをまとめたい」と、私の意見を打診するような感じのお話があった。私は「やりたい人がやればよい。のめり込む人がいなければ、本はできない。」というようなことを言って、暗に賛成しにくい意志を伝えておいた・・・つもりであった。暫くそのことは忘れていた。またある日、「長野山岳部の記録をまとめるので、一緒にやろう」と田島さんから話があった。これも前項と同じように「ムニャムニャ云々」式で、返事をして置いたが、その後幾度か、編集委員会議を持つ案内の便りがあっても「忙しいので」などと、決まり文句で逃げているうちに、第5回目の編集会議と作業を松本の県の森文化会館でするというので、ちょっと挨拶だけでもと出かけて行ったところが、とんでもないことになってしまった。「清水先生」について書くことも、巻頭言も、書きたいとか、書かねばならぬというような、私自身の思考の経緯はまったくなかった。これが、しんどい気分の第一である。

他人のことを文章にするということは、すべての人物評伝がそうであるように、その人物を描きながら、自分自身を曝け出すことだ。この私に、大学の先生で、文学者であり、詩の研究者で歌人であった先生を、何らかの形にして描くほどの力があろうはずはない。

ベルトコンベア型の結婚式の新婦が「私をここまで育てて下さったお父さんお母さん」といった両親への「世界中で、理想の極みの人間はあなたの他にはいない」というような甘美な涙をちらりと賛辞を、どうやって先生に捧げたら良いか、私には考えもつかないのである。

それに何よりも、先生が亡くなられてあまりにも長い時が流れ過ぎた。

先生が私どもの結婚の仲人の労をとて下さり、私どもに下さった祝辞の内容も、また、幾度となく学生たちと山行をなされたはずの時の様子も、思い出そうとすればする程、混濁の色が濃くなるばかりである。そうでありながら、思い出そうとしなくとも不思議と、記憶の底から浮かんでくる鮮明な情景がある。

それは、屋代の先生の仮住まいの一室で仲間と戴いた芋汁のご飯の味であり、西穂高岳頂上の近くから岳沢へ私たちと見事なグリセードで降った先生の姿であり、松本市山辺の居にご家族とすまわれていた頃、不条理な小児マヒのご子息を抱いては「〇〇さんが遊びに来てくれたんだよ〇〇さんだよ」「この児はね、ちゃんと私の言うことがわかっている

んですよ」と不遇を痛む言葉など全くなく、超然というのか、絶対安心の慈愛と呼ぶのか、悟るというのはこのような姿勢を呼ぶのかと凡夫たる私に迫る先生がある。いつの頃だったか、先生が退官されてからのことだったと思うが、田島さんが来松されて、私と二人で山辺のお宅を訪れたことがあった。いつものとりとめのない歓談の中で、非常に印象に残っている場面がある。先生が「叙勲を受けてね。勲三等で上京して戴いてきた。ちょっとみてくれよ」奥様が、「お若い皆さん興味ないでしょ。勲章なんてねえ」とおっしゃって、別室から、桐の箱を持ってきて開いた。先生は何か照れくさい様子であった。私は興味半分というところだった。旭日だったか、瑞宝だったか忘れた。「前に勲五等をもらっているからね」先生は少しばかり得意げであった。私は叙勲が、先生のどのような功績について与えられたのか、お尋ねすることもなかった。そして清水先生を思う時、なぜか強烈に思い出す一人の詩人がある。尾崎喜八である。これもある時、尾崎先生は数回豊科高校へ講演のため来信されていて、清水先生が私と一緒に講演を聴きに行かないかと、誘って下さった。講演をなおざりにお聴きしていた訳ではないが、内容はすっかり忘却している。帰りは尾崎先生、清水先生と私で、南豊科の駅から松本に出た。清水先生は他に所用があるからと駅で別れ、長野の放送局に用事があるという尾崎先生と、長野駅まで私は一緒にすることになった。この列車の中で、登山のこと、詩のこと、それから短歌のことまで、相当貴重な話題をくりひろげていた筈なのに、これも大部分がどこかに飛んでしまっている。西条の駅が近づいて、先生が「以前に、この駅というか、松本駅から西条の駅にね、忘れられない懐かしく思うことがありました。その時も松本から長野へ向かったんですが、松本駅から私の座席の前に一人の少女が座っていて、列車が動き出すと間もなく、一冊の本を開いて読み始めたのです。しばらく安曇野の風景を窓に眺めていましたが、ふと少女の本を見ると、どうやら「ヘッセ詩集」らしい。少女が膝の上に本を閉じたのを機に、私は“ヘルマンヘッセの詩が好きですか”とたずねると、少女はちょっと驚いたような顔をし、はにかむような笑顔をしました。それからヘッセについて、いろいろ話をしました。少女の眼が、深い水をたたえたように澄んでいました。どこまで行くのかと聞くと、学校の帰りで西条に住んでいるのだそうです。西条の駅が近くなつて、立ち上がった少女が“ありがとうございました”と明るい声で言い、私が“たくさん本を読んで下さい”と言うと、小さく頷いてデッキに出て行きました。私がそのヘッセ詩集の訳者であるとは名乗ませんでしたが、気付いていたのでしょうか、ホームに立った少女が私に向かってお辞儀し、なんとも爽やかな笑顔を見せました。その少女の背の後の遠くに、雲が山を包んでいて、そこに雷光が、まるで細いプラチナのように走っていました」先生にある感動を

与えた少女を思い描いているように、尾崎先生は柔らかい声で、ゆっくりと話された。私もその情景をありありと目に見るように思い浮かべてお聞きした。学生であった私から拝見する先生は、相当な高齢のかたであるはずである。その先生の瑞々しい詩情というのか、感性というのか、そういう美の持つ不思議な力にあつとうされてか、それとも私の乏しさからか、私は寡黙になっていた。

後で知ったことだが、尾崎喜八が「ヘッセ詩集」を三笠書房から上梓したのは昭和三十年で、尾崎喜八は六十三歳であった。

とうとう私は、清水先生について語り得ない。計らずも私は端たない自分の一端を曝すことになってしまったようだ。そして筆を置いて、以前よりもっとしんどい気持ちになっている。

### 生涯登山の先駆者清水悟郎先生

田島 守

生涯学習という言葉が使われるようになって久しい。それについて、生涯登山という言葉も世間に受け入れられてきているように思う。この言葉を口にするとき清水先生のお姿が目に浮かんでくる。先生は文字通り生涯かけて山を愛し自然に親しんでこられた数少ない生涯登山の先駆者であった。先生と共に歩いた山々はどのくらいあるだろうか。春の美ヶ原高原、夏の穂高岳、秋の戸隠高原、厳冬期の唐松岳、志賀高原のスキーとなつかしいひとこまひとこまがつい昨日のように思い起こされてくる。

歩きながら、またテントの中で先生から教えられたことも数え切れない。そんな中で忘れられない幾つかのことばがある。

冬山の八方尾根のテントの中だったろうか、夕食の時、先生はザックから写真を取り出されてその写真に向かって語りかけられた。「〇〇、山岳部のお兄さんたちと山にきたんだよ。お前も一緒なんだよ。良かったね。」小児マヒの後遺症で車椅子の生活を余儀なくされている息子さんへの静かな語りかけだった。先生のお子さんへの語りかけはしばらく続いた。言葉が途切れ先生はタバコに火をつけられた。「この子は私がタバコを吸う度にけむいけむい、お父さんけむいよ。と、言うんだよ。」その場にお子さんがおられるように話された。少し間をおいてから「田島君、私が山を登ったり、いろいろスポーツをするのは、勿論好きだからだがね。もうひとつ訳があるんだよ。この子を背負って歩ける体力をいつまでもつけておきたいんだよ。父親としての願いでもあるし務めでもあると思って頑張っているんだよ。」私はことばを失っていた。先生のそんな深い、辛いお気持ちを全

く知ろうともせずにいた己を恥じた。学部のグランドでサッカー部の学生と一緒に短パンにストッキングといういで立ちでサッカーをされておられたり、テニスコートで純白のユニホームに身を包まれて白球を学生と共に追われたりするお姿を時々お見うけし、若さを失われないお元気さに心打たれた反面ある種の揶揄したいような気持ちが心の片隅にあったからである。日頃の先生のお姿からは思いもよらないおことばであった。

「山を畏れよ」先生はことあるごとに言われた。近代アルピニズムが時に誤って山を征服するなどと称するのは慎むべきだ。謙虚な精神にとって山は常に畏敬すべきものだ。しかし、山は恐怖すべきものではないのだ。」生涯登山を愛された先生にふさわしいおことばと思う。先生は常に山にたいして謙虚に接しておられた。山への畏敬の念、忘れられないおことばである。

先生は針ノ木岳をこよなく愛しておられた。どのくらいのぼられたのか想像もつかない。いつかこんなことを言われた。それは、100回登って1回登ったと言う事にしているというような意味だったと思う。私はその真意を測りかねてきたが、いまだに分からぬ。おそらく、数的なものを超える境地、生涯求め続ける心のありようをそういう表現で表わされたのではなかろうか。

先生がお亡くなりになる1年ほど前里山辺のお宅を百瀬さんと訪問した。そのときどんな話をしたのかほとんど覚えていない。しかし、その日紅茶に砂糖を入れようとされて、スプーンからカップでないところに落とされられたのを見て、先生のお体がご自分の意志と関わりなく衰えておられるのを知り私は愕然とした。先生が師事しておられた山岳詩人尾崎喜八氏の詩集「その空の下で」をくださったが、形見となってしまった。

### 清水先生の教えと頂いたいくつものお便り

吉沢 健

いつの事だったか、どんな用事であったのか全く覚えていない。清水先生と二人で長野の街を歩いているとき、こんな話をして下さった。もう40年も前の事ながら、未だ忘れない。

○（清水先生がその父上でよくご存じの教育学部の学生）は、しょうがない奴だなあ。挨拶はせんし、小生意気だし・・・。このあいだたまたま顔を合わせる機会が有ったのでその事を○さん（○君の父上で、当時高名な校長先生であった）に言ったら、すぐにこう言ったよ。「叱ってくれたらなあ。」と。余計な事を言わんで、叱ってくれと言われて、さすが○さんだと感心した。全く人間を信頼しきっている。

私はこの話、わけても「叱ってくれたろうなあ。」という一言を、合宿で先輩たちの叱責の声を浴びるたびに思い返していた。その後、社会に出て批判やお叱りを受けるたびにも思い出して、自分の事を思って言って下さるのだと受けとめてきた。

しかし、近頃はご時世のせいか、叱ることが少なく、怒ることばかりが横行しているためか、あまり心に残る叱責の声が聞かれなくなつて寂しい。あるいは、それは私自身が年をとって、自分の言動がいい加減になってきたり、ころえ性がなくなってきたためかとも思っている。

清水先生がこの話を私にして下さったのは、今の私とそう年齢の違っていないお年の頃と思ってもいるのだが。



清水先生からはいくつものお便りを頂いた。折に触れ、所によりあの独特の文字で、こまめに書き送って下さった。

退職して、積年の雑誌や書類、プリントの綴り等を片付けていて、頂いたお便りを読み返す機会が有った。頂いた当時はそれほどにも思わなかつたが、この年で読み返して見ると、書き送って下さった思いの深さ、気配りの細やかさ、旧知を懐かしがられるお心が偲ばれて、当時の無沙汰が悔やまれる。

その二つを追悼とお詫びを兼ねて記させていただく。清水先生のお年は今の私よりもいくつか多く数えられていたと思う。

#### 拝復

御服喪中とのお知らせ、ご心中拝察しつつ拝見いたしております。年移り、世変わりという人生でございますが「いく年故郷きて見れば」の歌のように、故人の面影の遠くなつて行くのは、言ひようもない寂しさです。どうぞお心丈夫に、いよいよ貴家のご発展なさいますよう祈っております。(十月に五回目のネパールの旅に行って来ました。)

〈昭和56年11月1日〉

お忙しいご任務と存じますが、ぜひ一度お茶をあがりにおいでおくんなんしょ。  
田島守さんや、斐敏さん（二人とも下伊那に勤めたでなむ）も誘って！

〈昭和62年 賀状添え書き〉

## 清水先生の思い出 — 猿倉小屋での一夜 —

小林 盛男

山神は若き山の子等を愛すとみえたり

この詩歌が猿倉小屋の柱に掲げられているのが目に止まったのは、昭和31年4月3日—春山合宿で、小日向のコルのBCを撤収し小屋に引き上げて来た時だった。それは清水先生が書き残されたものでした。以来6、7年の歳月が流れた。社会人となった私の所に一冊の本が届いた。

「山を想えば」の表紙を開くと

謹みて

多年の山による友情を謝しつつ、われらの交わりも

小林盛男兄に

またかの山の如く美しく永遠ならむことを祈りつゝ

拙きうた一首を添えて

清水悟郎

駒草よ千鳥桔梗よ岩に咲く

汝がいのちを死なしむなゆめ

と記してあった。

この本「山を想えば」(百瀬慎太郎遺稿集)の“あとがき”を清水先生がお書きになられており、サブタイトルは一人の人間の精神史一となっている …前略…

日本の近代登山史の開拓期に、こういう一人の人があった、その人は深く山を愛し、また人を恋いつつ死んでいった。この人の建てた山小屋に心身を休め、この人の開いた道をたどりながら、あとから陸続と山に登りつづける人がある。それらの人々は、ひとしく山を愛し、人生を愛する人であるにちがいない。折あらば、どこかの尾根路で会って微笑を交わしたであろう。折あらばまた、どこかで同じ雪解けの冷たい水をくみ交わすであろう。今や知るも知らぬもない、同じ山、同じ人生における出会いの友であることにちがいはない。「山を想えば人恋し、人を想えば山恋し。」— この人は山懐の町に眠りながら、今なおこのことばを人なつかしげにくりかえし、山と人とにうったえつづけているように思われる。同じ山に、そして同じ人生に出会いを約束された人々、思えば、お互いになんと身近であることか。それら多くの人々に、この人の山恋しさ、人恋しさの遺志と、遺族の願いとを通して、この本を献げたいと思う。…省略

このメッセージ並びに詩歌、そしてこの“あとがき”に接して、山と人を思う純粹で敬虔で真摯な、猿倉小屋でのあの夜の清水先生のお姿が彷彿としてきた。時は昭和31年、田島L以下、少数精鋭の5名による極地法での不帰アタック、春山合宿だった。

我々が小屋から小日向のコルのBCまで荷揚げをしていた3月20日から3月22日頃まで先生は小屋に滞在され、スキーで小日向のBCまで同行され、一緒に滑られたり、夜はス

トープを囲んでの話を一登山、もしくは山への思索といった内容だったと思う一情熱こめて語られた。生涯登山を熱っぽく語られるお姿がありありと目に浮かぶと同時に、小屋の柱に掲げられていた冒頭の詩が鮮やかに思い出される。清水先生には志賀や菅平のスキー或いは夏山、春山と幾多のご一緒する機会を戴いたが、この合宿ほど印象が鮮明で、白馬とか猿倉とかを耳にする度に“生涯登山”が脳裏をかすめ、山登りとか山への思いが去来する度に、“生涯登山”を語られた清水先生が、猿倉小屋の柱に掲げられた詩歌が思い出される。私にとってなお青春であり“生涯登山”への憧憬とも原点ともなった猿倉小屋での一夜であった。

## 清水悟郎先生との想い出

滝澤 歌子（教育学部34年卒）

〈その1〉

あれは4月にしてはかなり暖かい日だったと思う。幸子さん、常子さん、範子さん、私の4人で松本のお宅をお訪ねしたのは。ご長男に先立たれたとうかがって、「先生相當に落ち込んでいらっしゃるのかも…。」という話から、お節介おばちゃんたちのお出ましとなったのである。しかし私の心の中には、もう一つの理由があった。それは、この年いただいた年賀状の次のような一文が、妙に心にひっかかっていたからだ。「『生涯登山』もだんだんと山を仰ぐだけで貴い“行”と思います。常子さんとごいっしょに話しにおいで下さい。何か記念になるものをさしあげたいです。お元気でね。」と。なんともいえない寂寥感が伝わってきて、どうしてもお会いしたい気持ちになっていた。この日、里山辺の地理が多少わかる私が運転者となって、食事やらおやつやらを詰め込んでおしかけ訪問をさせていただいた。二股に分かれた道にはさまれた、葡萄畠に続く石段の上に建てられたお宅からは、アルプスの山脈が一望でき、「仰高草舎」という名前もうなずけた。無人ではと思うほど静まりかえった家の中から、あのにこやかな先生のお顔が現れ、「よく来てくださいました。」と、ご自分の書斎へ迎え入れてくださった。この部屋で半日、山のこと友のこと、本のこと、世間のこと等語り合い笑い合って過ごした。奥様は時々お茶の接待に顔を出してくださった。少し話が途切れた時、「好きな本を選んで。差し上げます。」と言われて書棚を見ると、櫛の歯がとれたように本がぬけていた。こうやって大事に集められた書物を人に分けていらっしゃるんだと気づいたら、「形見分け」という言葉が頭をよぎり、やりきれない気持ちになったことを覚えている。午後はご一緒に近辺を散策してからお宅を辞した。「ブドーの季節にまたいらっしゃい。」と言われた奥様の言葉と夕暮れの玄関に

立っていつまでも見送ってくださったお二人の小さな姿が、今も鮮やかに想い出される。これが最後となったのだから……。

〈その2〉

国語科の中でも清水学級に属さなかった私は、先生とご一緒する機会は少なかったはずなのに、いつの頃からか先生のおっしゃる「生涯登山」に少しでも近づきたいと思うようになっていた。屋代のお宅での芋汁会や、先生との少ない山行の折にお聴きしたことが下地になっていたこともさることながら、先生の生きざまそのものと、山の仲間の中に流れる雰囲気がそうさせたのではないか、と最近思えるようになってきた。

さて、私たちOGは子づれで毎年山行を続けてきていた。上田で開かれたOBの総会の時その話をすると、「皆さんと子どもさんが山に登る姿を是非一度見たい。」とおっしゃった。

そのチャンスはすぐに訪れた。昭和58年のOG会が西穂と分かった時、先生は前日から上高地入りをされ、登山口で迎えてくださった。ここで全員で記念撮影したあと、西穂への1ピッチと共に登り「又山でお会いしましょう。」といって帰られた。この一時のために前日からおいでくださったとは、いかにも先生らしく胸がジーンとしていつまでも別れ難かった。先生78歳の時である。この山行のことを書いた私の文の最後は、こう結ばれていた。「上高地・穂高は、私たちにとって一番の故郷。次は涸沢から北穂へ行かれれば最高と思う。清水先生の言われる『生涯登山』を、改めて心に誓った山行だった。」と。

〈その3〉

「あなたもいらっしゃい。」清水先生のこの一言で、水曜会（清水学級）の学校参観旅行に参加させていただくことになった。同じ国語科ではあってもクラスが違えば顔見知り程度。その仲間の中にとび込んで、木曽・伊那の旅をさせていただいたのだ。一週間近くを、清水クラスの先輩を頼りながらの参観旅行だった。大桑中ではすばらしい授業と研究会に参加。おまけに泊めていただいた年配の女性の先生宅では、おいしい漬物の食べ方まで教えていただいた。次に訪れたのは馬籠。藤村記念堂を見学し、藤村の菩提寺（永昌寺）でご長男の楠雄さんと語らい、安藤教育長宅で囲炉裏を囲んでいただいた五平餅の美味しかったこと。翌日は峠を越えて飯田へ。当時最新の円形校舎の浜井場小を見学した後、天竜川にそって下って大下条小を訪問。最後は霜月祭りで有名な遠山地方を訪ねて、この旅は終わった。「大好きな旅行ができる」くらい軽い気持ちで参加した私だったが、行く先々で大学の机上では学び得ない密度の濃い実践学習が組まれていて、大へん勉強になったことを覚えている。と同時に、清水先生の人脈の広さと学識の深さにふれ、山とは別の

先生を知る機会ともなった。青春の日の山行を想う時、清水先生と共にこの旅も懐かしく想い出される。

## 生涯登山を貫かれた清水悟郎先生

柳沢 常子

清水悟郎先生と親しくお話をし、お人柄に触れた最初は、私が大学二年生の夏山合宿の針ノ木峠で一週間ほどテントを張り、白馬から縦走してくる本隊を待っていたときだった。女子部員だけの山行をしたいという願いを実現する第一歩として、針ノ木峠まで女子だけで入山し、清水先生が同行してくださった。先生は、針ノ木小屋を建てた百瀬慎太郎さんとは古くからの知り合いで、慎太郎さんの娘の美江さんの経営する小屋に泊まっておられ、私たちの自主性を重んじて一步はなれたところから見守ってくださっていたと思う。雨のために本隊の到着が遅れ、私たちは先生と毎日、針ノ木岳やスバリ岳の方へ迎えに行った。ライチョウの雛が親鳥と散歩していた。鳥の母性愛、自然の摂理、山に向かう思い、息子さんの事などいろいろな話をしてくださった。

卒業後、私たちは年に一度、子連れでOG会をやっていた。目的地は子供の成長につれて、戸隠、烏帽子岳、八方尾根とだんだん北アルプスに近づいていったが、その事を清水先生に年賀状でお知らせすると、先生はとても喜んでくださってチャンスがあったら同行したいと言われた。昭和57年8月、第15回OG会は上高地のサマテンに泊まり、西穂高岳に登った。清水先生は、上高地で合流して、西穂高登山口まで同行された。白髪、ウールのニッカーズボンに背広に登山靴、英國紳士スタイルで、79才とは思えない若々しさであった。別れる前に、親5人子供8人で車座になっておやつを食べながら、私たちの子連れ登山をほめてくださいり、最近行かれたネパールの山々や、ネパールの子供達への学用品援助の事など熱っぽく話され、「皆さんも生涯登山を続けてください。」と言われた。西穂登山口のオオシラビソの森の明るさの中での先生の表情や、次の日に見た夕日を受けたペガサスの雲がいまも瞼に残っている。先生のように70代、80代になるまで山登りを続けたいと強く思った。

平成1年4月、塚田・滝沢・吉沢と私の4人で、松本里山辺にある先生のお宅に遊びに行つたことがあった。お宅は、書斎の西の窓を開けると真っ直ぐに北アルプスが一望できる高台にあった。奥様を交えて持つていった昼食を食べながら、「ナマステ。」と手を合わせて、老年になっていくたびか訪ねられたネパールのお話をされた。ネパールの手工芸品をみせてくださいり、貧しいけれど信仰に貫かれたネパールの人々の生活を語られ、「皆さ

んも、ぜひ一度行くといいですね。」とおっしゃった。

帰りがけに、もうだいぶ整理されてガランとした書棚の本をさして、「欲しい本があったら、どれでも持っていってください。」と、言われた。高村光太郎の詩集と尾崎喜八の「いたるところの歌」の二冊をいただきて、またの再開を約束してお別れしたのが、先生とお会いした最後になった。先生は、日本古来の山岳信仰の心と、ウェンストン卿に始まった近代登山の精神を、兼ね備えて持たれていた。生涯登山を貫かれた先生の精神を受け継いでいきたいと思っています。

## わが師 清水先生との思い出

阿部 紀子

清水先生がお亡くなりになって、久しい。ご葬儀にも伺わず、失礼をしてしまった。でも先生は、あの慈愛に満ちた柔軟な笑顔で、私の非礼も許してくださいるような気がする。いつも笑顔をたたえ、心の窓を大きく開いて、優しく深いまなざしで、全ての人を受け入れ、神のような愛を注いでくださった先生でいらしたから。

私は、山岳部と国語研究室の両方で、清水先生にお世話になった。国語研究室では清水研究室を“水曜会”と呼び、毎週例会をもっていた。先生が創作された詩を鑑賞したり、先生に国語学会の動向をお聞きしたり、先輩への卒論のご指導を、共に伺ったりして、研修を深めていた。先生は時折り、「これは、手垢本といって価値があるんですよ。」といって、お持ちの蔵書を私たちに分けてくださった。先生は全てに平等で公平、激怒したり、人を非難するお姿は1度も見かけたことがなかった。日焼けした頬にオールバックの白髪、エーデルワイスのバッジをつけたブレザーが良くお似合いで、軽やかに大学の校内を歩いていたお姿は、まさにダンディーそのもの、その上に、高潔無比という言葉がぴったりの先生だった。

山に一緒したことは、2度ほどある。1度は2年生の時の冬山。常子先輩がリーダーで、八方尾根の黒菱のあたりにテン張っていたとき、清水先生がウィスキーを持って訪れてくださった。雪が降って行動は中止、私たちは先生からスキーを教えていただくことになった。私には、生まれて初めてのスキー。先生は、「いいですか、スキーは滑るものではありません。乗るものです。」とおっしゃって、スーイヌーイ、テントのまわりを回って見せてくださった。それから兎平の辺りを乗りおりしたのであるが、私は毎回ブッシュにつっこみ、スキーと雪と格闘したことが懐かしい。

2度目の山行は3年生の夏。大西さんと私で、針ノ木に同行させていただいた。大町で

針ノ木小屋の女ご主人と出会い（舎長と呼んでいた）、連れだって長い雪渓を登った。針ノ木小屋での2日目は雨。先生と百瀬舎長は、山のよもやま話をし、それをそばでお聞きしているのが楽しかった。3日目には天候が回復し、針ノ木とスバリに登った。途中先生が、ソーセージとキュウリを輪切りにして、マヨネーズをかけたサラダを作ってくださった。それがとても新鮮で豪華でおいしく感じたことを覚えている。それから数年してこのメニューは、わが家の食卓にたびたびのったが、あの時の味には及ぶべきもない。

卒業して13年目に、先生が、佐久を訪れてくださった事があった。国語研究室の先輩から声がかかり、私は娘を連れて参加させていただいた。先生は再会を大変喜ばれ、娘を横に座らせていろいろ話しかけてくださった。その写真が今も残っている。その時私は、先生が臼田中学校の校歌を作詞された事を初めてお聞きした。今回は、その石碑に出会う旅も兼ねているということであった。また先生は、ヒマラヤへいらしたお話もしてくださいました。「高山蝶 舞い降りしよとふと見れば 咲き残りたる みやまりんどうの花」その時にいただいた色紙である。

このように清水先生とてもお世話になったのに、そのご恩をお返しできないままに先生とお別れをしてしまった。本当に申し訳ない。“居てほしいときに親は居ない”とは人口に膚浅した言葉だが、“居てほしいときに師がらっしゃらない”と今、胸が切なくなる思いがします。

### 山を想へば

堀内 芳次

駒草よ深山桔梗よ岩に咲く

汝が命を死なしむなゆめ

清水悟郎

これは「山を想へば」（百瀬慎太郎遺稿集）をいただいたときに記してもらったものです。「山友 堀内兄に 一君が来遊を喜びて 64. 2. 11—」と添えていただいてあります。この言葉にずいぶんと恐縮したものです。この本が発行されたのが昭和37年8月ですが、その2年後、今から34年も前のことになります。清水先生には、学生時代からずっと親しくしていただきました。

「山を想へば人恋し 人を想へば山恋し」（百瀬慎太郎） 遺稿集は清水先生を中心にになって編集し刊行されたようです。あとがきで「日本の近代登山史の開拓期に、こういう一人の人があった、その人は深く山を愛し、また人を恋いつつ死んでいった。この人の建

てた山小屋に心身を休め、この人の開いた道をたどりながら、あとから陸続と山に登りつづける人がある。それらの人々は、ひとしく山を愛し、人生を愛する人であるにちがいない。折あらば、どこかの尾根路で出会って微笑を交わしたでもあろう。折あらばまた、どこかで同じ雪解けの冷たい水をくみ交わすでもあろう。同じ山、同じ人生における出会いの友であることにちがいはない。」とのべ、「この本によって、山を愛すること、さながら人を愛し人生を愛することである人々の、一人でも多くあろうことを心から祈ってやまない。」と結んでおられます。

ある時、後立山を縦走したとき針ノ木岳あたりで、お一人で山行しておられた先生とばったりお会いすることがありました。以後ご一緒に蓮華岳あたりで駒草などを眺めたあと、針ノ木小屋に泊まったことがあります。ちょうどその時は、百瀬美江さんと息子さんもおられて慎太郎さんのこと、山のことなどいろいろと楽しく語りあかしました。

清水先生にお教えいただくようになったのは、松本分校の2年間を終えて長野の本校へ移ってからで、現代文学を担当していらした先生の講義を受けるようになってからだったと思います。当時古代文学に徳光久也先生、中世文学に細野哲雄先生、近世文学に黒柳秀雄先生、現代文学に清水悟郎先生がおられ、私は細野先生の研究室に入れてもらったのですが、清水先生の講義は多く受けさせてもらいました。

西尾先生とご昵懃であった先生は、ご自分の講義にも言語生活重視の内容を取り入れられ、いつも斬新な教材をプリントされて興味深いお話をしてくださいました。

いくつかの詩を取り上げられた中で、今でも印象に残っているのは、高村光太郎の「レモン哀歌」です。「…かういふ命の瀬戸ぎはに 智恵子はもとの智恵子となり 生涯の愛を一瞬にかたむけた …写真の前に挿した桜の花かけに すずしく光るレモンを今日も置かう」。

先生の晩年、松本市里山辺のお家をお訪ねし先生と奥様にお会いする度に、光太郎と智恵子の深い愛情を重ねてみる思いがしたものでした。

この詩とともに、宮沢賢治の「永訣の朝」も取り上げられました。先生は、毎年9月21日の命日にちなんで花巻で開かれる賢治祭に行かれていきました。

また、登山家としても名の通った先生は、海外の高山のお話をご自分の写真や詩やスケッチを交えて学生たちに語られました。

「氷雨降る一万尺の尾根に来て咲き継ぐ花の命を想ふ」などの歌を添えながら。時に冷たい氷雨や嵐に曝されることがあるが、目立つ事なく、雄々しく、たくましく、一途に生

きる姿を想うということでしょうか。先生のお人柄からでた歌のように思われます。

先生はよく学生を山に誘ってくれましたが、先生と最初に登山をしたのは、中央アルプスの縦走でした。7人ほどのグループで、私とあと一人は、後から追いかける形になり、桂小場から入り、濃ヶ池で落ち合いましたが当時は池も広く水も豊かでした。二日目は空木岳を越えるあたりから暴風雨となり避難小屋付近にテントを張りましたが、結構厳しい一日で、後になって「あのときは堀さんがいてくれて助かった」などと言っていただいたものです。縁あって教頭時代を上伊那の宮田中学校で過ごしましたが、西駒ヶ岳の地元ということで3年間上伊那・下伊那の中学校集団登山の事務局を担当し、20数校の西駒ヶ岳登山のお世話をさせていただきました。おかげで、集団下見や自校の登山などで10回近く登ることができ、先生との山行や聖職の碑のことなどを思い出しながらの日々でした。また、仙丈岳も朝晩仰ぐことができ、山岳部の南アルプス縦走の思い出なども蘇ってくる日々でした。

「山を愛することはさながら人を愛し人生を愛することである」と先生のお気持ちのごとく、私も中学生の集団登山を大切にしてきました。白馬岳、燕岳、常念岳、西駒ヶ岳などの山に多くの生徒たちと登りました。いま、これらの山から集団登山の実施校が減少していく傾向があり残念ですが、ぜひ続けていきたいものです。それも、学生時代から山のすばらしさに触れてきたからです。

先生は生涯山を愛され山に登り続けられました。信大を退官された後もネパールへ何回も行かれており、その都度お話やおみやげをいただいたりしたものです。一度ご一緒させていただきたいと思いながら果たせなかったのが今では残念です。ネパール帽をかぶって、「ナマステ」と言われるのがとても似合ったものです。先生の山行スタイルは、いつもシャツにジャケット、ニッカに白のストッキングに登山靴でした。白髪に眼鏡の先生はとてもスマートに感じられたものです。ある時、いいなあと思っている心がおわかりになったのかジャケットとニッカをいただいたことがあります。きれいにクリーニングされ、ものを大切にされておられるのがよくわかり、そんなお心づかいをうれしく思ったのですが、何年か前、虫食いがひどく処分させてもらいました。

先生との山行で忘れられない一つに、ウエ斯顿祭の徳本峠越えがあります。この時は、確か槇 有恒先生や尾崎喜八先生もご一緒でした。このような方々とお話したり山行ができたのも清水先生のおかげでした。いわな留の小屋や峠の小屋は今はどんなでしょうか。

ウエ斯顿の碑の前での喜八先生の詩は今では覚えがありませんが、美ヶ原高原を歌った詩は心に残っています。結婚し子供ができるからも家族で必ず春と秋との二回は上高地を訪れてきましたが、そんな度に懐かしく思い出されます。山岳部では5月の涸沢合宿で槍ヶ岳を往復したことなども合わせて思い出されます。また、秋の岩登りなども。山岳部のことでは、剣岳の遭難時には、大変悲しい思いをいたしましたが、その時先生は部長をしてくださっていて、たいへんなご心痛をおかけしました。

学生最後の冬三月、先生とスキーに志賀高原へ行っていました。横手を滑りながらどこへ就職が決まるかなと思い、山のあるところがいいなあと言っていたのですが、初任地は南小谷中でした。おかげで山とスキーの生活を続けることができました。就職一年目の昭和41年11月24日中土小学校の研究会にお出でになりお会いすることができました。こんなにはっきりとしているのは、実は「1967アルパインカレンダー」をいただいたあるからです。教師生活一年目から二年目のことがメモしてあり今回懐かしく読みました。

そこに先生のお心のこもった添え書きがあります。

堀内 芳次兄に

中土中学校研究会の日に

66. 11. 24 清水 悟郎

山が永遠であるなら  
われらの山への思慕もまた永遠  
山が清く、美しくあれば  
われらが友情も、清く美しくあれ  
いつかの山旅の忘れがたい追憶  
またの日の山旅への期待  
われらが友情、つねに温かくあれ

いま、こうして読み返してみると先生の温かさをただ唯ありがたく思うのみです。学生時代の私、そしてまだ社会人一年目の私にこうも一人の人間として、温かく接していくくださる先生、こうした愛情はすべての学生・山仲間に注がれていたのでしょう。

先生は晩年、松本市里山辺に住宅を構えられ住んでおられました。北アルプスの山並みはもちろんですが、槍ヶ岳の見えるところをあちこちと捜されたようです。住宅の正面に

常念岳が臨まれその左方に槍ヶ岳の穂先がしっかりと見えます。花、とりわけ野の花を愛されたので玄関へ入る通りの両横や南側の庭先にたくさん植えられていました。玄関を入ってすぐの右側の部屋が先生の書斎でそこでいろんなお話を伺ったものです。たくさんの書物がありましたが、だんだんと寄贈されるなどして整理なさっておられました。今思うと少しばかり無心をしておけばよかったなあとも思っています。特に山や宮沢賢治に関する貴重な書物などは。賢治祭に毎年出席されていることは先にも書きましたが、先生のお気持ち、お振る舞いにも賢治に通ずるものがあったように感じております。お話をしていると奥様がコーヒーなどをいれて静かに入ってこられました。住宅の西側には20坪くらいでしょうか、ぶどう畠があって、ナイガラの木が数本植わっており、秋には必ずぶどうを取りに来なさいと呼んでいただき、一箱も切っていただいたものです。黄色く熟し切ったナイガラの味は格別でした。畠と道路の横には双体の道祖神があります。

今年の秋、先生のおられないお宅を訪ねてみましたが、手入れはされていませんが、昔のままで、秋の野の花がひっそりと咲いていました。寂しく思いました。

清水悟郎先生には大変お世話になりました。そして、いろんなことを教えていただき、また、多くの思い出もいただきました。ありがとうございました。



## 関 義臣 氏

### 関 義臣さんの思い出

小柳津次清

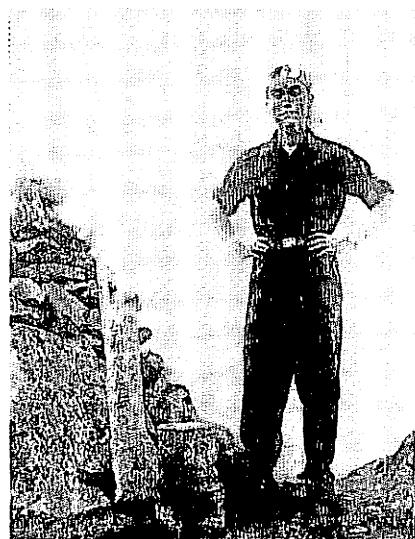
関さんとは県陵山岳部からの付き合いであった。彼は身体的理由等でサッカー部を辞し山岳部に入部した。昭和23年終戦間もない頃でもあり、部の山行もばつばつで、ようやく岩登りをはじめた頃でもあった。先輩の山男、深沢正二氏に手ほどきを受け、時々鳥帽子岩に出掛けた。また、写真家でもある太田四郎氏や中沢義直氏らの指導もあり影響も大きかった。

関さんは高2の時、周りの警告を振り切って手塚宗求らと冬山に挑み、雪洞を掘り三泊、成果をあげて帰ったが、当時「雪中露営」は県下でも初めてのことと新聞に報道され話題をまいたこともあった。また、当時、神城ヒュッテにおられた北穂小屋の小山氏の指導もあって、北穂滝谷をはじめ、涸沢周辺の岩場で鍛えられ、ロッククライマーとしても安定した技術を身につけた沈着冷静で勇敢なる山男であった。

信大時代は私自身も、北鎌、小槍、前穂その他岩場を有する行程をもつときは、いつも関さんの豊富な経験に支えてもらった。また、理科の教師でもある彼は実に誠実で真面目な紳士であった。豊富な経験を誇るまでもなく、自己宣伝は全くなかった。そんな厳しさをもつ反面、実に楽しいユーモアの持主でもあっていつも楽しい山行を共にさせてもらった。信大に編入してからは、サッカーも一緒にやるようになりあっちこっちの大会に参加したが、試合の帰りにはきっと山の話となり、またそれが、次の山行の動機ともなっていた。

関さんとは、どことなく「似た者同志」なのでもあったのか、よく気の合う仲だった。山行の意味も「山頂を極める」のであり「征服」ではなかったと思う。自己の心身の鍛錬であり、修行の場であり強靭にして温かい豊かな心を育む場であったように思う。そして、そこにはいつも仲間との共存があり、自然との共存があった。だから、彼との山歩きは楽しく、岩も植物も山の自然そのものが美しかった。心が洗われるようだった。いつも信仰と挑戦と科学とが同居していた。このことが山行が次の生活のエネルギーとして働いたようと思える。

退職して時間がとれるようになったら、彼からよく聞いていた雄大で美しい南アルプス・八ヶ岳等を案内してもらおうと楽しみにしていたのだが、夢のままでおわってしまったことは、本当に心残りであった。



農鳥岳にて

次に奥さんの慶子夫人から頂いたお手紙の一部を紹介したい。

独身時代の関さんについては、彼が山に行くと、お母さんは必ず毎朝、氏神様へお参りを行っていたそうです。すると、近所の人が「義臣さ、また山へでも行ったんだろう。」と、いつも語り草になっていたとのこと。このあたりにも関さんの山行の「心」が推察できるように思う。

奥さんがそんな彼に「どうしてそんなに山がいいのか」尋ねると、「山は人生の縮図だから」と語っていた。また、「我が青春に悔いなし」とも言っていたそうです。純粋に山を愛した彼の二人のお子さんの名前は長女が登美子さん、(山は登るほど美しくなる)長男は岳志君でした。終わりに彼の闘病の姿勢について奥様からの手紙文の一部をそのまま引用させて頂く。

「どんなに苦しいときでも絶対にねをあげず、周りの人に気をつかい、耐えにたえたあの姿勢はどこからきたのだろうと思うとき、やはり、「山」かな!と思うときがあります。そして、私までも「死の恐怖」から救ってくれる思いのする時があります。身をもって病気と闘う姿勢を教えてくれました。あの強い信念は、やはり登山から得たものかも知れません」

生前、エベレストへも行きたいと言っていたようなので、ぼつぼつ、県陵で同じ考えをもって山行を共にしていた友で、春山の表層雪崩に逝った宮下敬（法政大）らと、登頂を楽しんでいる頃でしょうか。一噫――

### 小槍の思い出一関 義臣さんを偲ぶ

田島 守

夏の夕陽が落ちると、小槍の狭い頂にも夕闇が迫って来た。早く下山しなければルートを見失ってしまいはしないか、と不安になってきた私の心を知ってか、満月の柔らかい光が照らし始めた。「月の光に照らされて下るなんて、いい思い出だんね。」関さんの言葉で順次懸垂下降にはいった。まず、関さんが下り、彼の指導をうけながらそれぞれ下降した。全員が下りザイルを片付けると、大槍の裾を巻きながら肩へと向かった。足元を月の光が照らし出し緊張感の後の快い疲労感を味わいつつ一步一步慎重に歩を進めた。少し進むとなんだか暗さが増して來た。まわりはどんどん暗くなりほとんど見えなくなってきた。「ちょっと待ちましょ。」関さんの言葉でみんな立ち止まった。「月蝕だね。」上島さんの言葉で天を仰ぐと月はほとんど隠れていた。そうかそうかと納得して暗闇の空を眺めた。涼しい風が汗ばんだ肌に気持ち良い。

「そろそろ行くかい。」小柳津さんの言葉でゆっくり歩き始めた。再び月は姿を現していた。「こんな経験は二度と味わえないね。まあ、ちょっと心配したが。」「全くだ。一時はほんとに心配したぜ。」そんなことばを交わしつつ肩のテント場に戻った。満月の光は煌々

と稜線を照らしていた。

関さんとの山行を思うと真っ先にこの日のこの場面が思い出されてくるのだ。昭和28年の夏山合宿のことである。教育学部山岳部再発足の年の7月25日だった。

この年、関さんたちと山岳部作りに関わさせていただいた。幾人かの先輩方にいろいろ教えてもらったが、関さんには本当にお世話になった。当時、クライミングの技術を身につけていた人はほとんどいなかったが、彼はきっちとした技術と理論を持っておられた。そんなわけで、私は関さんから基本を学んだ。彼は親切に教えてくれた。主として「物見の岩」で訓練し、大文字岩や烏帽子岩登攀の経験はあったが、本格的なクライミングはこの小槍が初めてだった。それだけに忘れられない日であった。

誠実で謙虚なお人柄の関さんは山に対しても大変謙虚であった。その彼が一日の厳しい山行を終えた後、夕暮れの中、小槍登攀を実施したのは、ひとえに私の願いを実現させたかったからと思う。この夏山山行に小槍登攀の実施を強く希望していたのは私だった。しかし、計画のこの日は千丈沢・天井沢出会いの出発時からピッチは上がらず予想外の時間がかかってしまった。槍の肩に着いたときは既に夕方だった。本来なら、そんな中小槍登攀をすべきではないであろう。

好天、満月、次第に調子を上げてきた部員の体調、翌日の予定等を総合的に判断し実施に踏み切ったと思う。小槍の頭で日が暮れることも、月の光で十分行動できることも月蝕も承知の上での判断であったろう。したがって、暗くなても彼は少しも慌てなかった。「練習のように慎重に行きましょ。」今も関さんの言葉が聞こえて来る。

### 水科 信 氏 「水科君」のこと・「山」のこと

久保田 寛

12月初旬、私の住む「濃尾平野」に、思いがけず雪が降り、一面の雪景色となった。

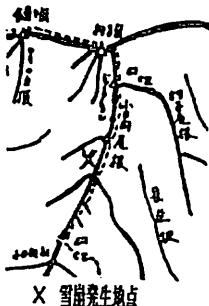
そんな風景は、ふと「雪山」への想いを運んでくれる。

昭和31年の春、白馬連峰杓子岳、小日向尾根～不帰岳往復の「春山合宿」が、田島し以下、5名で行われた。

3月17日入山し、3月31日不帰Ⅲ峰アタック完了と順調に進み、4月2日下山中の出来事である。この日は天気も良く、全員でジャンクションのCⅡ峰を撤収し、B.Cへ下山中、通称「奥双子」を過ぎ午前11:00頃と思う、トップにいた私の足元が突然動き出し足をすくわれた。その瞬間何が起きたか分からなかつたが、アッという間に流され必死になってピッケルを立てた。10m位?で止



西駒ヶ岳にて



まって助かったと思った。私は倒れたまま下を見た。大小の雪塊が落下して行く中に黒い人影が見えた。私の後ろにいた水科だ！その姿が見え隠れしながら滑落してゆくのが見えた。水科！と叫んだ。200m位？流され雪崩本流の左端で止まった。大丈夫か！と誰かが叫ぶと、彼はすぐ立ち上がって大丈夫！と返事が来た。雪崩の本流は更に谷の方に流れて行った。私は立ち上がったが震えが残っていた。水科の所にも駆け寄ったが、彼も震えていたのをおぼえている。田島Lのホッとした顔と、大きな表層雪崩の跡が残っていた。その後この出来事については田島しも、皆あまり語らなかった。しかし「水科」のことを偲ぶとき、私にはどうしても心から離れない出来事として、今も残っている。

水科と私とは上田松尾高校の同期であり、信越線通学でいつも一緒だった。「一浪五人男」といって、松尾から一浪で信大に入った5人（教育1 工学4）は、全く勉強しない学生で、長野駅まで来るが、学校とは違う方向に行くことが多かった。中では水科は良い方で皆とは一線を画していた。残りの内、2人は単位不足で留年した。やがて5人も卒業とともに「縁切れ」となり、それぞれ今までとは全く違う世界に進み、以来全く会うことなくなくなった。ある時、水科の事故による「訃報」を聞いたが、訪れる事もなく、私には「信州」の人々も山々も、遠い存在となってしまった。しかし「信州」への郷愁を消すことは出来なかった。「濃尾平野」から彼方に白く輝く信州の山々を眺める時、Busseの詩のように「山のあなたの空遠く…」との想いを消し去ることは出来なかった。

還暦を過ぎた今日、3年前から「山登り」を続けている。且つて登った山々に「何か残してきたもの」があるような気がして、跡をたどってみる。そして「ここにもう二度と来ることはないだろう」と想いつつ、下山してくる。これからも可能な限り続けたいと思っている。私は何時も「心に残る人ととの出会いとは」そのお付き合いの長短ではなくその時に「カチッと火花が散るような瞬間があった時」ではないかと思っている。水科との出会いも、その一つだったかも知れない。

この度、水科宅を訪れることが出来、奥様にもお会い出来た。「事故」の様子も聞き、また母校「上田高校」で、10年教鞭をとっていたことも知った。奥様は「今も信じられず、帰ってくるような気がします」と言っておられた。私は彼の墓前にひざまずいた時、急に寂しさが込み上げて來た。

「散る桜、残る桜も散る桜」 しかし逝くのが早すぎた。

## 「熱い風呂に入る時は…」

吉澤 健

水科信君とは同期で久保田君と男子3人のみで部活動生活を4年間一緒に送った。いくつもの山行を共にして思い出は尽きない。

水科は不思議な魅力を持った男であった。「ほう、それみい」とか「その方がいいじー」と口ぐせの言い回しで、普通生活の細部に至るまで身につけていた知恵をよく披露してくれた。その1、2を記して水科を偲ぶよすがとする。

○新人の頃、水科は合宿でエッセン当を分担することが多かった。テント場に着いて、あるいはベースキャンプで夕食から朝食の準備・片付けまで、やることが多い。3000M級の稜線では飯もうまく煮えてくれず気苦労が絶えないものだ。しかし、水科はこれらの仕事を手際よくこなした。後でわかったことだが、彼は米のとぎ方から炊事全般をお母さんから聞き出し、習ったのだという。いつだったか、鍋のふたをちょくちょく持ち上げては、煮えかけんを確かめていた私に水科は「鍋のふたをとると熱が逃げてしまって30%も仕上がりが遅くなるんだじー」と言って私をとがめたことがあった。男っぽい彼が珍しくも専門的なことを言うものだと驚いたが、これもお母さんからの直伝であったのかと、やるべきことに万全を期して臨む彼の姿勢に感じ入ったものだ。

○あれは卒業して何年めか、冬の〇B会が乗鞍の信大ヒュッテで開かれた時のことであった。夕食前の一時を利用して水科と二人で風呂に入った時のことである。

湯がとても熱くてすぐには湯槽につかれない状態であった。せっかちな私は、ぬるくした手桶の湯で体を洗って、いつものように入る用意をしたが、湯槽の熱い湯はなかなかぬるくならない。外はマイナス10度に近い寒さ、そのうちに体が冷えて来てぶるぶる震え始めた。

この私の様子を見ていた水科は「湯が熱い時は入れるようになるまで体をぬらしちゃだめだじー」と諭すように言う。見れば彼は体にはまだ湯をかけずに、水道の水をどんどん出して、湯槽の湯をかき混ぜていた。身につけた彼の生活の知恵に驚いたものだ。

その後、寒い季節、熱い風呂に入る同様のことが幾度もあった。その度毎に私は水科と一緒にに入ったあの乗鞍の入浴の時のことをありありと思い出す。

○酒がめっぽう強くて、山行で一休みする毎に「一本つけなくちゃあ」と言って、小雨の時でも吸い口を濡らしながら煙草を吸い、がんこで、意地っ張りで、無器用でスキーでもよく転んだ水科。それでいてめんどう見がよく、数学専攻らしく理詰めで、すっきりしていた水科。

私はそんな機会があったら迷わずに水科と久保田をまたザイルパートナーに選ぶだろう。彼をラストに、久保田をトップに置いて。むずかしい壁にさしかかると、後から、「ほう、右にいいホールドがあるじー、もっと壁から体を離さなくちゃあ」という水科の声が聞こえてくるようだ。

## 今も生きている水科先輩語録

柳沢 常子

「おめさんたちは、上田産の馬と牝馬だからな。(しっかりやれよ)」

山岳部に入って初めての部会の後、中央通りの「どりこの焼き」の店に宮尾さんと私を連れていってくださったときの、水科先輩の言葉が今も鮮明です。「おめさん」、「牝馬」など、度肝をぬくような言葉にも、先輩の温かさが籠っていた。

最初に、水科さんと山に行ったのは、私の新人歓迎登山で戸隠縦走をしたときだった。残雪の戸隠を縦走して、牧場のテンバに着いたときは雨だった。

「どんな雨の日でも、新聞紙一枚で火を焚き付けられなければ、食料係は失格だ。」と、言って細い枯れ枝を井げたに組んで、その上にだんだん太い枝を乗せて重ね、文字どおり新聞紙一枚でかまどに火を焚き付けてみせ、さすがと感心した。その後、学校の子供達をキャンプに連れて行くときいつもこのやり方を伝授し、この言葉を思う。「味付けは、さしすせその順に。砂糖、塩、酢、味噌の順に入れていけ。」「食料係は、皆の食器に御飯を装ってやり、戦争(食事)が始またら、人のお替わりを盛ってやりながら自分も負けないように食べて、皆と、一緒に食べ終わること。」など、合宿の食料係としての心得を教えてくれたのも水科さんだった。

水科さんの家と私の家は、歩いて10分くらいの距離で、二度ほど遊びに行った。

「俺のお袋はな、美人だろう。昔は新町小町と言われていたんだ。」

その言葉の通り、水科さんのお母様は、高砂のじじばばのような美しい表情の白髪の方で、合宿の度に菓子折りいっぱいの稻荷寿司を差し入れてくださった。6:15発の松本行きの汽車の中で、私たちはそれを分けていただいたものだ。

冬の雪を頂く鳥帽子岳にも、「上田産のほかの馬たち」と連れていってくれたり、チヨンチヨン焼きと水科さんが言う焼き鳥屋に一杯飲みに連れて行ってくれたり、山以外でもいろいろ後輩の面倒を見てくれた先輩だった。山岳部の先輩たちは山にも本気で登り、学業の成績もよいという人が多かったが、水科さんもその一人だった。行動は、冷静沈着。合宿のときは縁の下の力持ちを發揮して、チームを支えていた。ある合宿の「沈澱」のと

き、誕生日の話題になり、一番生まれが早かったことで、久保田さんが、「そんなら、水科はオジイチャンだ。」と言ったことから「オジイチャン」と呼ばれ親しまれていた。

卒業後も、何かと接点のある先輩だったが、父の病気の看病に上田に行く電車の中で二三度会ったことがあった。母校上田高校の学年主任をしているということで、とても張り切っていらしたのに、間もなく水科先輩の訃報を知り、本当に信じられなかった。その後、縁あって屋代小学校に奥様とご一緒に勤めた。山野草を愛する素敵なお方で、私の家に遊びにこられたとき、庭のフタリシズカを差し上げたら、「私がヒトリシズカを庭に植えたら、ヒトリシズカなんか植えると一人になっちゃうぞ。と主人が言ったことがあったわ。」と言われ、水科さんらしい言葉だと思った。

名実共に「オジイチャン」になるまでお元気でいてほしかった温かい先輩である。

## 中田 邦夫 氏

中田邦夫君のこと（エンジニアと山男）

久保田 寛

昭和34年12月発刊のスナック3号「シルエット」欄に、以下のような中田君のことが書かれている（投稿者不明）

「一見、ボサーとしているが、話すと味のある人間である。話はじめると、内容の豊富なことに驚く。ボソリボソリと話すのが印象的で、実に親しみを感じる。言葉を慎んでいるところに、それがあるのかも知れない。確かに話すことは少ない、しかし一度口をきると適切なる言明をする。約束の堅いのもうなづける、いかにもエンジニアという風格を持っている。」

—以下省略—

私が4年の時、中田君が2年で山岳部に入部してきた。同行した「山行」は、昭和32年の「夏山」「冬山」の2回のみで、彼の人間性について、残念ながら深く理解はしていなかったが、概ね「シルエット」欄のような印象を私も持っていた。

彼は工学部土木工学科卒だが、当時の山岳部に工学部の学生は少なく、先輩の私にとっては貴重な存在に思われたし、期待も大きかった。当時私にとって大きな悩みの一つはエンジニアと山との両立についてだった。私見だが、何故か「山」にのめり込む程に、エンジニアとしては失格してゆくように思えた。（個人の能力によるが）

私は就職後、会社に「山岳部」を作り、その責任者として活動したが、昭和39年北鎌尾



根で2名の犠牲者を出してしまい、（私は参加していなかった）会社を首にはならなかつたものの、それを機に「山」を普ッソリ止めた。技術家集団のこの会社でも、「山」に熱中している者は出世もしないし、退社した者もあった。その点彼の場合は異なった。

中田君の経歴を見る時、当時国家公務員（6級職）試験に合格し（工学部の合格率5%程）建設省に入った。勿論彼の才能によるが、山岳部から彼のような人材が出たことを誇りに思っていた。そんな順風満帆の彼に、こんなにも早く不幸が訪れようとは！残念でならない。昭和43年5月に30才で、新潟出身、スキーの名手174%の彼はこの世を去って逝った。昭和40年に結婚された和恵夫と長男を残して……以来30年余が過ぎたが、奥様のご苦労も大変だったと想像される。

先日奥様と連絡がとれ、電話でお話しさすることができた。

彼は建設省入省、一ヶ月東京本庁で勤務の後、四国の勤務となり、高知、高松、高知と転勤、主として道路、橋梁の業務をしていたとのこと、特に亡くなる前に担当した土佐国道の建設は、業務が多忙で日夜にわたり、疲労が激しかったとのこと、その時更にお母さんが亡くなられ新潟に帰省、四国に戻ったら、課長として松山に栄転が待っていた。そんな多忙の連続で倒れ入院、一ヶ月後に病名も不明確のまま亡くなられたとのことです。まさに仕事に命を捧げた典型的のように思われる。

奥様に「ご主人は山のことを奥様に話されたことがありますか？」と聞いたら、「信州に梓川というキレイな川がある、女の子が生まれたら梓と名付けよう」と言っていました、と言われた。

30才で仕事に命を捧げて逝ってしまった彼は、誉められるべきか？責められるべきか？私には分からぬが、先日百瀬さんが、ふと漏らした「人間、ひとの手を借りる程に、長生きすることが、良いこととは限らない」と言った言葉が気にかかる今日この頃である。

### 故 中田さんへ

吉澤 範子

私は山へ行きます。でも私の山行は味もそっけもなく唯歩くだけ。雪も花も岩も見るらしいけど帰って来るとみんな忘れてしまう。だけれども、山も人も私にいっぱい何かをくれます。何より次の山行の気力を。

中田邦夫さん…私が1年の時中田さんは2年。知的でスマートで、まぶしいばかりの山岳部の先輩。それだけで、他に接点なんてあったかしらー。ありました、私の青春の山日記の間に、中田さんからもらった「あははは」という笑い声が。

時は昭和38年1月。前日に信稜会総会を終えた有志一行9名は、鈴蘭スキー場よりシールをつけたスキーをはいて出発。途中、大森・吉澤・中田・上島・丸山のファイトマンは鳥居尾根へ。宮島・祢津・小林（シールなし）の諸氏につきそわれたような私を含む一行は夏道をたどり、冷泉小屋にて一同落ち合い昼食。更にかつての「名ラッセラー」らがトップを交代しつつ位ヶ原山荘まで。

名ラッセラーらが名（迷？）スキーヤーに変わり下り始めた。“やわらかい雪。冷泉で落ち合うことを約す。ヤッケとオーバーズポンの完全装備なので思いっきり転べる。急に大きくジャンプしたら、体が雪の中にもぐった。前で中田さんが「あははは」と笑った。まるで雪のお風呂だ。後から来た誰もが雪の中に顔をつっこんだ。まるで雪と戯れているみたい”

そう、鳥居尾根の熊笹にのった雪のラッセルで苦しめられた一人のはずの中田さんがスキーは抜群。みんなが転ぶ場所の前に、山岳部に似ずスマートなクリスチャニアで来てビシッと止まり、この難所で苦しむ我々（私？）を見て「あははは」と笑ったのだ。いや苦しんだのではない、雪と戯れた我々もこの笑い声に安堵しほばされて、冷泉小屋経由鈴蘭スキー場へ帰着した。

この「あははは」は前にも一回聞いたような気がする。山を始めたばかりの一年の秋山。この日の北穂東稜は新雪だった。使い方もよくしらないピッケルを持って岩と吹きだまりを交互にヨチョチと歩く私の後で、生まれ故郷二本木の雪で鍛えた中田さんはかっこよさを發揮していた。この日の「あははは」は、雪と岩が輝く北穂に登った満足の笑いだったと思います。

その後中田さんの訃報に接し驚きましたが、私の心の中には北穂でのさわやかな笑顔と共に万年青年として刻み込まれました。

今こんな形で四度中田さんにお会いして、東稜は無理かも知れませんがもう一度北穂南稜を登る希望が湧いてきました。その時は中田さんにいただいた余裕の「あははは」をかみしめたいと思います。

### 山岳部には類のない優等生中田さん

柳沢 常子

「荷物を背負わせるとすげえ馬力で、雪山はめっぽう強かったなあ。スキーは下駄のように体の一部になっていたし、大学の単位もしっかり取っていた優等生。」と、いっしょに山に登った人たちは、中田さんについてそう語ります。

中田邦夫さんは、昭和12年新潟県二本木の生まれで、信大工学部土木工学科に入学し、春山合宿から山岳部に入りました。たいていの部員は初めての合宿には、後々まで語り継がれるエピソードがあるのですが、中田さんにはそれがないのです。合宿に遅れたとか、「持ち物、洗面道具」と書いてあるのを見て洗面器まで持って合宿にきた人、雪崩の中を泳ぎ出て助かった話などなど、みんな個性と結び付いた数々のエピソードを持っているのに、中田さんにはエピソードがない。エピソードがないというのが中田さんの個性なのです。大学の単位もよい成績でしっかり取り、山に登れば大きなザックをもくもくと担いでボッカ力は抜群、雪山のバランスは確かで冬山には強く、卒業と同時に、さっと建設省に入った中田さんでした。

2年の夏山合宿は、本隊は7月16日から白馬～穂高にはいったのですが、中田さん達工学部2年生は、久保田さんをリーダーに後から入り、本隊を追掛けて穂高で合流しました。「いつも謙虚で物静かだったが、荷物はよく背負った。馬力はあるしバランスもいい。」という評判でした。

中田さんとは3年の涸沢での秋山と、卒業式を前にした4年の春山合宿に同行しました。春山は釜トン・上高地経由、横尾尾根にBCを設営し、槍ヶ岳アタックが目標でした。晴天続きで、朝は、アイゼンやピッケルにての指が凍り付く寒さでしたが、晴天に恵まれ、横尾尾根の上に出ると前穂～北穂～南岳～槍ヶ岳までの峰が青い空を突き刺していました。私たち4年生は、横尾尾根のサポートをして、私と大森さんは、卒業式のために早く下山したので、かの中田さんの雪山テクニックは、あまり印象にありません。テントの中で雑談しているとき、個人装備の入っている2×5センチほどの小さな布地を丁寧に縫い合わせた裏付きの袋を見せてくれました。お母さんの手作りの袋を持って来るなんていいなと思ったことを覚えています。

その年の4年生追い出しスキーは菅平。朝早くシールを付けて根子岳に登り、山頂から一気にゲレンデまで滑り降りるのでした。スキーの本場出身の、中田さんと小野さんは、「俺たち、30分後に行くから。」ということで、私たちは、転んだり、斜滑降キックターンをして、ダボスの上まで来ました。「中田たちに抜かれなかつたよなあ。」と言いながら、皆はかなり待っていたのですが、来る様子もないで、宿に行くと、二人はとっくに着いていたのです。彼等は30分足らずで滑り降りたのでした。ただ一つ中田さんにまつわるエピソードです。

中田さんは、卒業すると建設省に入り高知に赴任しました。「・・・私の方は、南国土佐にきて、ますますのんびり屋になってきたようです。3日ほど前に、研修のために約一

月の混雑した東京から帰り、今更のように、高知の温和な気風を有り難く思っています。雪にはまったく縁がなくなり、山らしい山にも入れないことは残念です・・・」というはがきをいただきました。

その後、高知の職員旅行で、中田さんを訪ね播磨屋橋の辺りで、山の話、仕事の話などしましたが、それが彼と話した最後になりました。中田さんは、31才のとき、奥様と、1才になられる娘さんを残されて白血病のため亡くなられたと風の便りに聞きました。子供達とスキーに行くたび、根子岳大滑降の日を思うのです。

## 中沢 俊夫 氏

必ずや大事を成し遂げてくれたであろう中沢君

吉澤 健

中沢俊夫君は私が4年になった年に入部して來た。体がそんなに大きくはなく、むしろ細身で、こんな体で山に登れるのかと思ったりした。

新人の夏山合宿で、白馬から後立山、穂高岳を経て上高地に至る北アルプス全山縦走を試みた。長野山岳部も部員数も増え、ようやく充実して來た昭和32年のことである。



秋山・涸沢にて—右端—  
1657. 10

合宿2日目か3日日のことである。白馬大雪渓を越え、小雪渓の急な登りにかかった頃からバテはじめ、一行からおくれだした。そんな彼と4年生の私は、その頃の習わしであったマンツーマンの二人組みで、むしろのんびりと後立山連峰の尾根筋を歩いた。所々の雪渓トラバースでは、へっぴり腰で雪の斜面にへばりつくように歩くので、あぶなっかしいことおびただしかった。少し荷を軽くして隊と行を共にしていた合宿中ほどにごり沢岳の下りであったか、スリップし合宿途中で下山を余儀なくされもした。

あの時、ころげ落ちて所々負った擦過傷の処置で、傷を消毒しようと考えたが、消毒用アルコールなど持ち合わせていない。仕方なく合宿打ち上げの最後の夜のために持っていたウイスキーの大びんの栓を切り、脱脂綿にひたして傷口をふいた。ウイスキーが傷にしみて彼は「痛い痛い」と悲鳴を上げた。そんな彼に誰かが「せいたく言うなよ、ウイスキーで・・・」と励ましを込めて言うと、彼は例の「うふふ」という含み笑いで応じたことを今もありありと思い出す。

水筒の水で洗うこともできたのに、アルコールにこだわったウイスキーでの処置は、傷

にしみてさぞ痛かったろうと、今もってすまないことをしたという思いが消えない。

新人夏山合宿の彼のその後の活躍は、しかし目を見張るばかりであった。盟友町田（上原）君と滝谷第一尾根の登攀をなし遂げた事などはその一つに過ぎない。私など夢見ながらも、ついぞ果たせなかつた快挙である。

いち早くはるかなるヒマラヤへの夢を持ち、資料を集め、研究を始めたのも彼の成長の証であろう。山に対するひたむきな情熱が彼をしてああも大きく成長させたものと思う。「ふふっ」と含み笑いのような人なつっこい笑い顔と、もぐもぐと口を動かしていく、いつまでも嚥下しない物の食べ方は依然として変わっていなかつたが。

前山小学校の不慮の事故で彼はあわただしく逝ってしまった。教職についてまだ二年めのことではなかつたのか。

長野県教育の神髄を日本全国に知らしめ、とどろかした彼の尊くも気高い行為ではあつたが、あの事故がなく、大成していれば山岳部にとっても教育界にとっても、必ずや大事を成し遂げてくれたであろうにと、惜しみても余りある。

ただただ冥福を祈るのみ。

### 滝谷の思い出　　一中沢俊夫君を偲ぶ—

上原　金四郎

遠い記憶の糸を、今になって手繰り寄せようなんて、その時は思っても見なかつた。ただあの頃は狙い定めた山を、又ルートを踏破してみたい欲求だけが強かつたような記憶だけがある。そして一方では、学生時代、たいして勉強をした訳でもないのに、大学4年ともなれば家の家計の事もあり何とか卒業せねば、と言う想いもあった。裕福な時代ではなかつたのだから、それが当たり前かも知れない。中沢俊夫君との滝谷行きを決めたのには、そんな事も一因としてあるかも知れない。しかし、一番の決定要因は、二人がまだ滝谷に岩登りを目的に入った事がないという事であったろうと思う。今はどう想われているか知らないが、その頃、滝谷は山を歩くものなら誰でも一度は入つてみたくなるような所であった。基礎的な部分があり、古典的なルートあり、一生懸命読んだ「岳人」のアルピニズムを満足させてくれるようなルートが沢山あり、とにかく魅力に満ちたところであった。

私たちは、夏も最盛期を過ぎた頃、涸沢の北穂よりの所にテントをはつた。期間の事については全く記憶にない。後から考えてみると1週間くらいの予定だったようだ。合宿中なら5人は入るテントに2人だけ、しかも食料は比較的多く運び上げてあり、まあまあ快適なテント生活の始まりだった。特別話し合つて決めたわけではないが、「イチニチ

イッポン」と言うのが、私たちの暗黙の了解だった。

入山の翌日は雨で行動しなかった。その日の夕刻、一人の若者が北穂の方から降りてきた（少なくとも、私たちよりは年少だったと思う）。雨に濡れ、泊まる所もないと言う。テントに招じ入れ、色々と話すうちに、彼は写真好きで山の写真を撮って歩いていた事などがわかった。そこで早速、私たちの滝谷登はんの事を話し「われわれに同行し、記録写真を撮ってくれ」という事になり、3晩ほど彼も一緒に生活する事になった。

雨の後は比較的好天に恵まれた。クラック尾根、第一尾根、第二尾根はP2 フランケとその上部、ドームはCフェースからその上部を快適に登る事ができた。中沢がトップに立ち、途中は交替しながらの登はんだった。どのルートも、難しさよりもむしろ岩角が割れたてのように新鮮だった事が印象的だった。なにしろ我々にとって比較の基準となるものは、いつだってあの「物見岩」だったのだから。視界を遮る泥の塊もなければ、すり減ったような岩角もない。あるのは、ただ堅く冷たい岩肌と雲と這松の他はわずかな高山植物のみだった。

この山行は、計画から実施まで中沢が常にリーダーシップを取り積極的に動いてくれたので実現したもので、彼には本当に感謝の気持ちで一杯である。準備のために、ハーケンやカラビナを買いに運動具屋に行ったのも、アブミを確かめた事も、重いザイルを点検した事も、みな、今では語る事もなくなった二人だけの思い出である。

彼は、いい意味で本当に義理人情に厚かった。それでいて冷静で且つ大胆だった。山行きの時は勿論の事、具体的には何も思い出せないが、日常生活の色々な場面で彼には助けてもらったような気がする。その後も、ずっと教員を続けていたら、又話し合う事も多かったろうにと思う。三十数年後、今、追想の中にいる。

### 中沢俊夫君の思い出

柳沢 勝輔

乗鞍山頂は冬にはめずらしく晴れわたっていた。風はそよ風で展望もひらけ、日だまりで心地よく一服していた。

信稟会の総会を兼ねた正月の集いが、その頃は乗鞍の鈴蘭で行われることが多かった。信大ヒュッテが出来た頃で、宴会ができるということと百瀬斐敏さんの口ききで梓川村営小屋が常宿となっていた。会員は毎年の冬の総会を楽しみにしていた。ずいぶん大勢集まった。中沢俊夫君と私が常任委員だったので、勿論参加常連であった。

一日目にスキーをしてその夜は総会、宴会となり、次の日は大方の人達がスキーをかつ

いで乗鞍岳に登った。スキーは雪国の人を除いてはお世辞にも上手とは言えず、スキーよりもワッパの方が速いという人達が多かった。それでもスキーをかついでの乗鞍登山はさほど苦にもならずプルーカ・ボーゲンで降りる下りのことなど考えもせず、一丁前のスキー講釈やはらっ話で笑い声が絶えなかった。

大方の人は乗鞍の肩の小屋付近でスキーをやっていて、頂上まで登った人達も下って私と中沢君の二人だけになった。中沢君はピースの缶からタバコをとりだし、吸うというよりはもったいない程ふかすといった方がいいような喫煙をしていた。そして少しばかりながら、「俺、この春に結婚するつもりだ。ついちゃ、ヤナやんに司会をしてもらひてえ。」ときりだした。無論私は快諾し、二月に入ったら細かな計画やら打ち合わせをすることになった。

中沢君は一人先に下山した。「佐久はスケートが命だで。」といって、三学期の学校が始まる前の冬休み中に氷に乗っておきたいと計画話をしていた。肩の小屋からみんなに見送られて、スキーをハの字に広げながら前のめりになって、いつ転ぶかわからないような格好で滑り下っていった。そして位が原の這松帶の辺りでスキーをぬぐ姿を見て、無事下ったことに私は安堵した。やがて彼の姿は米粒ぐらいになって手を振ったように見えた。

私は当時、飯田市の緑ヶ丘中学に勤務していた。三年生の担任だったので、冬休みの休日を返上しての学年会に出席していた。やっと午前中の会議が終わって、日直員のために職員室に臨時に置かれたテレビを学年の先生方と一緒に見ていた。突然、画面に「佐久でスケート事故」と字幕が出た。私ははじかれるように身震いした。「中沢だ。」瞬時にそう思った。そして「中沢」と報じられないことを一生懸命祈った。ニュースはその後、「佐久の小学校」「先生二人、児童一人」と時をずらして報じられた。「前山小学校」と報じられて、こみ上げてくるせつなさをどうすることもできない。「中沢教諭・・・・」と出たのは時間もだいぶたっていた。昭和39年1月9日のことであった。

とても午後の学年会に出られる精神状態ではなかった。それに飯田から佐久まで7時間ぐらいはかかるし、列車の接続もうまくいくか気になる。学年主任に話して暇をもらい、佐久へ向かった。小淵沢駅で小海線の最終に間に合った。どういう状況なのかもわからず、三反田の駅で降り、とりあえず切原の祢津直行君を訪ねた。それから真暗闇の寒風の中を祢津君のバイクにしがみついて岩村田の中沢宅に着いた。

すでに涙が枯れはて、泣きはれた顔ながら落ち着きを取り戻していた中沢君の母上が「俊夫が待っています。会ってやってください。」と座敷に案内された。

先着の仲間の皆と、ちょうど化粧をほどこし終えた遺体に面会した。捜査に手間取って、

水中でひっかき回された傷痕は痛々しかったが、眠った顔は実に安らかだった。

母上の「俊夫、よくとび込んだね。」の言葉に、中沢君の冷たい手を握っていた私は、こみあげてくる涙をこらえきれなくなった。

通夜の啜り泣きに耐えきれず、私は雪山賛歌を歌った。仲間の皆が唱和してくれ、延々と山の歌を歌い続けた。歌っては泣き、涙をぬぐってはまた歌った。ぬぐってもぬぐっても涙は止まらず気を取り直そうとしてもまたこみ上げた。

小学校5年生の児童を引率した中沢君は、前山の池の土手に登り上がった時に事故を察知したらしい。6年の先生が児童を池から助けようとして水に沈むのを見て、土手の上から駆け降りそのまま凍った池にとび込んだようだ。一日でも多く氷上滑走をさせようと思って児童を引率し、その池を土手の上から見下ろした時に、水中に沈む同僚と児童の姿をみた中沢君の気持ちはどんなだったろう。救助の鉄則とされる縄があるか竹の棒があるかなどと見回す余裕もなく、ただ「大変なことが起った。」と感じ、普段は死ぬと分かっている凍った池にとび込んでいったのだろう。息もつまるような苦しさのまま—。

一大事を感じて冷たい氷の水にとび込んだ中沢君。彼はそういう人だったんだ。人の苦しみを悲しみを捨てておけない人であった。なんでそんなに人のことを心配するんだろうと思うほど人情家だった。そんなことが後輩の人達からもしたわれる所以であったろう。今、もし彼にこんな話を持ち出せば、きっと横から私の横腹を突ついて「おい、よせよ。」と照れるような姿さえ想像される。

一緒に山を歩けたらどんなにか楽しかっただろうに………。

## 片岡 格 氏

### 格さんの思い出

小林 盛男

昭和35年4月4日、春山合宿が終わり、ブルー色のテント一つ横尾に残して上高地でパーティを見送った。“爺っちゃんおまたせ”と特徴ある黒眼鏡の奥に笑顔を浮かべた格さんとしっかり握手したのは河童橋の前、二人での山旅はその日から始まった。

水車小舎を今宵の宿とし、せせらぎをおつまみに一杯やりながら、槍ヶ岳登頂や横尾尾根合宿の皆の活躍、なぜか国境稜線でポキッと折れた門田のアイゼンの話題、加えてヒマラヤ遠征の夢など、熱っぽく語り合いシュラフに入ってもなかなか寝付



けないほど興奮した、久しぶりの一夜でした。翌日は晴天で西穂山荘まで快調に登り、夕食のあと“ザイルに油ぬりまっしょ”と格さん、装備の点検とナーゲルの手入れに余念がない二人、食糧を分配してザックにつめ、並べて置く。ライトを消して窓から星空を見ながら眠りに着いた。西穂頂上まで出会った人は2名のみ、以降下山時、上高地で行き合うまで人っこ一人姿を目にしなく、穂高連峰を二人占めした我等は3日目、天狗のコルに雪洞を掘って泊まった。“これ使いまっしょ”と格さん、新調のオレンジのツエルトを引っ張りだしたが別の使い道があったことが、後で、判明した。“爺っちゃんご免”と出もの張れもの所きらわざとばかり‘獵師’になり、ツエルトのカーテンを見事に使った格さん、翌朝私も見晴らしの良い雪洞の中から遠くに富士を眺めながらの快適な一発。天真爛漫な格さんとオレンジのツエルトとがダブッて、今なお忘れられない天狗のコルの一コマであった。

ジャンダルムへの登り“飛騨側、下りまっしょお”と格さん、トラバスでも“ザイルにしまっしょお”と難所での的確に声を先に掛けてくるのは格さんだった。ロバの耳でも「ザイルだそうか」と私が声を掛けようかと思った矢先、息ぴったりで彼の声が先だった。奥穂まで「しょっぱかった」が快晴の国境稜線は素晴らしいかった。泊まりは奥穂小屋、ガランとしたうす暗い小屋の中、ザイルと二つの山靴を並べ、広々した冬期部屋を二人でのびのびと使い、念のためピッケルだけは手許に置きシュラフに入った。翌日、涸沢岳から稜線を快調に北穂まで歩を進め、合宿の跡を探さんと、尾根から槍を眺め、懐かしい小屋、霞の間に泊まったと覚えている。二人だけの山行は今宵がフィナーレと握手と乾杯、歌って最後の夜を過ごした。

北穂沢をグリセードで泳ぐ様に涸沢まで下った時、格さんが“爺っちゃん、いい天気だから一気に松本まで下りまっしょ”と言い出した。“時間も早いから、そうすっか”と私、ピッチをあげて横尾まで下った。二人して黙々とテントを撤収した直後、突然に格さん、“ここからは気儘に帰りましょ”と、言ったので、山行を横尾で打ち上げ、好きな径を別々に歩きだした二人だった。格さんと結んだ絆のザイルを詰めたザックを背に私は満足した山旅を反芻しつつ、足のおもむくまま歩き、上高地は小梨平に立った。

静寂の中、雪の重みで落ちた太い落葉松の枝を見て、ふと故郷の野山が浮かび、涸沢から横尾までに浮かび出た格さんの想いが何となく分かる気がした。松本でのアルコールの誘いばかりではなかったと。

河童橋を通り過ぎし沢渡に近づくにつれ‘格さんは何処を歩んでおろうか’と後ろを振り返り、振り返り帰ったのを今なお鮮やかに思い出せる。

ランタン・リルンの見えるケルンで寮歌を再び歌う日よいつか。

## 「片岡 格さんのこと」

宮島 卓浪

片岡格さんは、北海道は札幌の昭和12年生まれと思います。信州の山に憧れて信大工学部土木科に昭和32年入学、教養課程は松本の当時の文理学部に入り、直ちに山岳部に入部しています。旧制松高山岳部として、世に名を知られた伝統を受けついでいる部で、全国から我こそはという強者が集まっていて、なかでも5年・6年以上山岳部に在籍という猛者がごろごろしていました。小生も格さんと同年に入学し、教養は松本の文理でしたが、すぐ横の高校時代山岳部に籍をおいて、よく松高の人とは一緒になりました。

彼らは戦前から帝大系の山岳部をさしあいて、地元の有利さを生かし、松高ルンゼに名を残すように岩場を主体に大活躍していて、憧れと畏敬の念を持ってみていきましたが、地元の学生の入部は少なくほとんどが他県の人だったと記憶しています。

長野へ移ってからは格さんも長野山岳部へ入り、教育・工学両学部の構成メンバーだったので女性部員も多く、楽しい山行が多かったように思います。工学部は人数的に少なく、先輩諸氏の中でも身近な学年の小林さん、故中田さん達とはよく登りました。

同学年の格さんを初め小野さん、戸澤さん、小生の四人は、近隣初め谷川岳あたりまでよく足をのばして登りました。格さんとの山行は細い身体に大きなザックを背負って、ヒョーヒョーとした歩き方で、人間的に引きつけられるものがありました。

2～3エピソードを話すと、戸隠牧場から五地蔵の峠をくだり、裾花川源流の清水沢をくだっていると大夕立に合い、張ったばかりのテントをまるめてひっかついで、ホーーーのいで山の斜面にへばりついて一夜を明かし、翌朝、格さんは流れ下るような滝の落ち口の良い場所で大キジをうっていると、突然上流から流れの中を腰まで浸かって5～6人の男女がくだってきた。双方一瞬顔を見合せたが、格さんも下を向いたまま立つわけにもゆかず、彼らも川から上がるわけにもゆかず、ずいぶん下流まで腰まで浸かってくだって行きました。

次の年には裾花川のもう一つの源流、濁沢を遡行した。他の三人は一日早く先発し、小生期末試験を終わり、焼酎1升と乾パン少々もって追っかけましたが行けども合流しない。先発は本流と支流を誤り、今の水芭蕉の群生地あたりで迷いに迷って、元の木曽殿アブキまで戻ってしまい、あきらめてくだってしまった。小生は本流をどんどん登りつめ、高妻山の西の急斜面をかけ上がり、雪の中を3日目に頂上についた。フラフラになって帰ってきて、翌日学校に出たら「来なかったのか」と言われて返す言葉もなかった。

北穂小屋の小山さんの紹介で、当時志賀高原一ノ瀬におろく小屋を構えていた山本教雄

さんの小屋へ四人とも入りびたりになり、山で生きる男の姿を学んだ。山本さんは当時から現在でも志賀高原の自然を愛し、大御所として君臨している。格さんとはよく気があった。当時は清水平までしか林道がなく、本州と王子製紙がトラックに1本しか積めないようなブナやトチの大木をどんどん伐採して出していく、よくトラックに無賃乗車をした。

卒業の年の期末試験の年だったか、前日格さんと小野さんに、朝学校に行きがけに起こしてくれと頼まれ、中御所の二人の下宿へ寄って声をかけると、二人とも頭を上げて「わかったありがとう」と言うので、下宿のおばさんに挨拶して学校へ行った。後で二人がえらく怒ったが、当人達は起こしてもらったことを覚えていないと言う。二人とももう1年留年するはめになった。あの時たたき起こせばよかったとその後悔やんだものである。

35年冬には一日中ラッセルしても数百メートルしか行けない雪の中を、笛ヶ峰の牧場から火打山まで登り、本邦初じゃないかと悦に入ったものである。その頃、格さんの山スキーの技術は本格派でずいぶん教わることが多かった。

その後、格さんは卒業して不破建設へ、小野・戸澤両君は横浜市役所へ入り、格さんの川越の現場事務所へ遊びに行ったこともある。また、山岳部から送ってくる会報で、格さんがヒマラヤ遠征の隊長になることを知り、羨ましいのと懐かしいのとで、いっぺんに会いたいと思っても時あたかも神武景氣、とても仕事は抜けられない。そうこうしているうちに突然富士山で遭難の報にせっし、びっくり仰天、しばらくは格さんの夢ばかり見た。

今は黄泉の下、極楽の花の野をヤッケを斜めに背中にかけて、ヒョーヒョーと歩いているかな。それとも須弥山の雪の斜面をスラロームでスイスイと滑っているかな。遠い昔の話になりましたが、今でも鮮明に想いだせることあります。

合掌。

## 片岡格さんの思い出

小野 義郎

もう、40年も昔の話である。

昭和32年の春、格さんとは同じ札幌から、土木工学科に一緒に入学した。

彼の家は月寒にあり、私の家とは離れていたし、当然高校も違っていたから、新聞の合格欄で見たのか、あるいは、入学時の名簿で見たのかは思い出せないが、25人の新入生の中に、同じ郷里の出身者がいると言う事を初めて知り、何とも心強く、会うのが楽しみだった。

私は、先入観で、格さんも工学部のある長野で教養課程を受けるものと思っていたが、暫くして、彼は、松本の文理学部で寮生活をしていると友人から知らされた。

私も山に憧れて信大を選んだ一人であったが、彼はもっと強烈な山への思いをもって信大に入り、当然のごとく足場のいい松本での生活を選んだのだと思うが、そんな理由から、一年のときは会う機会も無いまま2年に進級し、初めて、共に工学部での専門課程を受けるようになった。

当時、私は、九反の荒木さんの12畳の離れに四国出身の島田さんと二人で下宿していたが、ある時、彼は、私と同室では勉強に身が入らないらしく、出ていく事になった。

丁度その時、庭に下宿用の別棟が建てられ、私がその一室に移り、あとには七二会村出身の石坂さん兄妹が入ったが、私の隣室に来たのが格さんだった。

格さんは酒が強く、また私は全く呑めない質なので、酒の付き合いは出来なかったが、彼は陽気で、太っ腹で、友人を大切にし、勉強はあまりしているのを見たことは無かったが、山への情熱を純粋に持ち続け、あふれる山への思いのなかで、よく呑み、真夜中の街から歩いて帰ってきたのを今でも思い出す。

六畳一間の下宿部屋で、壁のドアを開けると彼の部屋であり、本類が畳に積まれ、座るのも大変だったが、部屋は風通しが良いため外と同じ気温で、冬の寒い時も、暑い夏も隣の部屋によく遊びに行ったのを思い出す。

4年の秋になり、後期試験が始まって、パスすれば卒業・就職と順調であるはずだったが、明日は朝一番からコンクリート工学の試験があるという日、共に得意の徹夜のつもりだったが、朝の4時ごろ一眠りと寝てしまった。

目覚めたのは9時半ごろだったろうか。格さんと教室に飛び込んだ時には、もう試験時間も終りに近づいていた。「すいません、寝坊しました」と正直に打ち明けたが、青山教授は「そう、また来年受けければいいよ」と慰めてくれたのである。

格さんも私も五年生になり、彼は山に入る日が増えて下宿にいる方が少ない日々であったが、幸いにも我々は六年生にならずに卒業でき、格さんは建設会社に入社した。

その後、会う機会はなくなったが、一度だけ、真っ暗に暮れた胸までかかる雪の中を6時間も歩いて、小林先輩、格さん、戸澤、星野、柳沢の諸氏と福島県の滑川温泉で過ごした。この時の一夜は、格さんとの忘れ難い思い出として、全員の胸の中に今も生きている。

小穴自成氏

冬山雑感

小穴自成 (1962年冬山合宿チーフリーダー)

全員無事合宿を終了し、目的を達成することができたことは喜ばしいが、大変後味の悪い合宿になってしまった。早く言うなら失敗ではないかと思う。この批評は私一人の主観的なもので誤っていたら指摘してほしい。

今回は極地法であり、この方法も問題ではあったがもっと根本的なもの、部員一人ひとりの気持ち・思想・行動における欠如を見逃せない。あのような考え方でよく山に登りたがるものだと疑問に思われることが多々あった。換言すればばくがない、自主性がないということである。

極地法であるから、サポート隊は荷物をサポートすれば良いというものではない。メント間の連絡も重要な役目であるが、それがなかった。「おれはここまできたから後は誰か行ってくれ。もういきたくない。」という。サポート隊に選ばれた不満はあるかと思うが、何とか口述を設けてサボろうとしていた。あまり動こうとしなかったり、ラッセルを嫌がったり、荷物の重量の不満もあった。こんな考えでは山に入る資格はないと思うが、特に厳しい冬山では、健全な精神や自主的な行動が要求される。

これらは上級部員にも責任はあろうかと思うが、このような精神面や行動面の欠如が思われぬところにあらわれていた。晴天の2日間の停滞は泣けてしまった。自分の任務遂行でなく自分勝手な行動をしたためである。また吹雪の日にも問題があった。この日3人が凍傷にやられたが、決して行動できない日ではなかったし、防げた凍傷であった。連絡不足のため装備が上がってこなく、つまずいてしまった。怠慢といわざるを得ない。

2日間の停滞は痛く、アタック日をねらえず、ラッシュでやるはめになってしまった。装備の点検にも問題が残された。古い電池の入ったラジオをそのまま持って行って使えず必要品がなく、たるんでいるとしか言いようがない。トラック便乗は合理的に行動でき大変有益であり、使用するのは良いが、歩くのは絶対やだときめつけている節が見られた。帰りのあのスピードある歩き方と比較したら矛盾を感じる。

以上の問題点に私の経験不足が加わりミスが続出し、これが直接事故に結びつかなかつたのが幸いであった。



冬山合宿槍ヶ岳へ右端一  
1961. 12

## 故 小穴自成 君

大西 道夫

小穴自成君は松本分校の山岳部で2年間を過ごし、昭和35年度～38年度長野で4年と、6年間を山に青春を燃やし続け、昭和40年病魔に勝てず早逝した。

私は長野での初めの2年間山行を共にしたが、その後の活動についてくわしくは知らない。しかし私にとっての最大の合宿、積雪期北アルプス全山縦走は最も頼もしいパートナーであり彼にとっても良き時代であったと思っている。しかし部員の心も次第に新しい風の影響を受けて、自己に厳しい（上記の冬山雑感にあるごとく）彼にとっては耐えられないものであり、次に来る危険な兆候を予感せずにいられなかった。

というのは、彼にとっても長野山岳部にとっても慚愧に耐えない昭和39年度の剣岳の秋山合宿のチーフリーダーとして遭難事故を起こしてしまった。その報告文集を読んでみると彼の苦悩は察して余りがある。長野山岳部の体質の急激な変化に最後まで逆らった貴重な人間であり、その板ばさみで苦しんだことを思えば、更に彼の死が痛ましい。

彼は普段無口で、小柄な体のどこにそんなファイトが宿っているかと不思議に思えるような好青年であった。学園生活でのつき合いはほとんどなかったので彼がどんな勉強をどのように頑張っていたとか、どんな彼女がいて、どのように遊んだかは皆目わからなく、それでいていざ山に入ると、何も言わなくとも、気持ちがすべて通じ合っていた。縦走では重い荷物を奪い合うように担いだし、苦しくてもおくびにも顔に出さず、いつもにこにこしていた。話は余り好きではなく、いつも聞き役にまわってそして幸せそうであった。しかし強烈な自己主張をもっていることを私は上記の「冬山雑感」で知り、初めて彼の新しい一面を垣間見たような気がする。それは決して感情に走ったものではなく、新風吹きすさぶ長野山岳部に対する痛烈な警鐘であったと私は思っている。

小穴自成君のみ靈の安らかならんことをお祈り致します。

合掌

## もどらない日々の断想

— 小穴自成さんの思い出 —

野口 忠世

「もどって来るために山へ行く」と学生時代に思っていた。他の方々のように、薫り高い理想や挑戦はなく、怠け者で弱虫の私である。従ってこの思い出も、本来1965年8月の慰靈祭で退部したつもりの私が書くべきものではないと思っている。ただ、今もある感傷と共に甦る人々のことを誰も伝えることがないと伺って、日記のいくつかを拾い書きして

おきたいと思った次第です。

その日、「自成死去」の電報が届いて私はすぐ豊科にむかい納棺に立ち合った。

五月十九日（水） 晴れ (1965年)

昼休み電報が来て呼び出された。小穴自成さん死亡の通知であった。この2～3日、一度小穴さんのところへ行こうと思っていたところだった。五日に山を下りてきてそのおり病院によったが容態は悪くなっていたし、それからもう二週間も見舞いに行かなかったので心配になってはいたのだった。私のすることはいつも手遅れだ。頼りにする人々が身近なところから次第に去っていくのを見る最近、今日の報せは、その駄目押しと思えた。

小穴さんの家で、お父さん・お母さんにお会いした。

「山をやるのはいいが、身体だけは丈夫にしておいて・・・ネ。親の心配はどんなんだか・・・。」お母さんが、涙をこぼしながら私達の身を案じる。

「こんなことになるなら、ヒマラヤでもどこでも行かせてやればよかった。本当に、親より先に逝くなんて・・・」と語るお父さん。無念というか理不尽というか。

焼香をし、最後のお別れにお顔を拝見した。全く青白く静になった顔は、以外にやつれていはず、穏やかな優しいいつもの顔に見えた。その顔を見ながら、ふと私は蕪村の顔を描いた絵を思い出した。ご家族と坊さんだけのひっそりとした納棺だった。 (以下略)

五月二十日（木） 曇り

小穴自成さんが死んだ。18日の午後2時だったという。

昨日、お宅にお邪魔して納棺の儀に参列、きれいな死に顔であった。棺に納めながら親兄弟は涙を流しておられた。静かな時が流れた。長男であり、好人物であり、山にあっても寮にあっても、時々見かける学内においても私は小穴さんの大きな声を聞いたことがない。いつもその丸い童顔の笑顔と背をまるめた姿の優しさが安心感と優しさを感じさせていた。自分には厳しく愚痴や批判を他人にあびせた姿を私は知らなかった。その人となりを認めないものはないだろうと思っていたが、それでいて独人でいるのがよく似合った。

一度、二度と繰り返された蜘蛛膜下出血について強靭な体力も内なるファイトも失われたのであるうか。最後にお話を伺ったとき「柳沢、山形、申し訳ない・・・俺もすぐいくぞ・・・」と病床で語っていたのを思えば、崩壊していく自己の肉体の苦痛の中にあってさえ、あの憎むべき遭難の痛みが消えず、一層その病状を悪くしたのではないか。

(中略)

退部された時の気持ちが今頃少しあわるような気がするなんて情けない奴だ。そればかりではない俺はその時小穴さんを責めたのだ。遭難の後始末と部の在り方など混乱する中で何人かの人々が去っていった。一人でも傍にいてほしいときのこの焦燥を、俺は非情にも小穴さん自身に向けたのだ。

秋に第二次の搜索に出掛けた。馬場島から池ノ谷への川原を私達は確かにたどって彼らの衣服の切れ端でもロープの切れ端でもないかと探し歩いた。F 3 の合流点ではまだ新しい石の匂いのするような堆石のあちこちを探し回った。たぶん精一杯だったに違いない。しかし、その報告を聞いた小穴さんが非常に残念がったのが今でも聞こえてくるようだ。なんの手がかりもない広く果てしなく続く川原を歩くのは頼りなく虚しいことであつただろう。確かに私の気持ちの中に手の抜けた・気の抜けた気分が流れていた。小穴さんならば、その時なりに納得のいく搜索をして帰ったに違いない。（後略）

六月一日（火）晴れ

30日に戸隠に入って今日下山してきた。（中略）

田沢駅から歩いて小穴さんの家に向かった。稲が植えられ、一面に水のはられた田圃が広がり、広さを増したような安曇野の6月の風景である。山はすべて霞の中、ゆったりと流れる大きな用水路は安曇野の宝といおうか。（中略）

小穴さんの家で、田部重治さんの『旅への憧れ』『心の行方を追って』のどちらかをいただきたいとお願いした。小穴さんは田部重治さんが好きでその著作をいつも持ち歩いていた。あまり本など読まない私は「田部重治」などという山岳関係の著述家がいることを知らなかった。また、小穴さんは、『岳人』や『山と渓谷』とか『わらじ』などといった雑誌類の初版本マニアでもあった。そんなことから、田部さんの本をいただいておきたかったのである。山に対する考え方や人生や人の出会いなどについて、大いに尊敬し、共感していた田部さんである。その調子は次のようである。

「山の雄大な気持ちに打たれるのは、頂上に辿りついたときよりも、群山を圧して立つその勇姿を途中の渓谷や峠から思わず仰ぐときや、立山や薬師岳のように麓の高原から頂上を眺める時や、或は神河内渓谷から穂高岳を仰ぐ時などのように、登攀がまだ完成されないときの方が多い。そういう時にも山の勇姿がすっかり現われているよりも、かすかにたなびく白雲の間から出没している方が、遥かに雄大な感じを与える。・・・・・こうした気持ちはたしかにロマンティックなものである。いつまでもいつまでも充たされないものをもっている態度だ。山の姿に魅力を感じると共に、そこに絶えず何かしら未知なるも

のを移入して考える態度である。人生に希望がなくならない限り、人間にロマンティックな態度はなくなりそうもない。。。。」

老父母は、拳で肩をトントンと叩きながら、「なんだかはりあいがなくなつてね、だるくて、だるくて。。。。」笑い顔を作っている。「最後の何週間かは、注射と点滴だけですね。痛みをこらえている様子が思い出されてね。。。。」と瞳を潤ませる。

七月五日 (月) 晴れ

今日は小穴さんの四十九日だ。お父さんがドイツアザミとバラを切ってくださったので弟さんと墓前にお供えした。 (略)

小穴さんは、『町の中の山日記』という日記を書いていた。大学ノートに書いていたように思う。多くは田部重治さんであったようだが、入院の近付いた1964年末ごろに辻村伊助さんの『スイス日記』の序の抜き書きが載せられていた。

それは、「忘却は人間の有する最大の幸福である。」という言葉に始まるものでした。

「。。。。それを負うて歩まねばならぬ人の運命はいかに悲惨なものだろうか。」小穴さんはどのようにこれを読んだのだろうか。

私はやはり思い出さなければよかったですと思っている。あの時もやはり小穴さんことを知らなかつたし、今では一層遠い知らぬ人になっていることがわかつた。そして、無残に自分がまだここに在ることも、つらい話だが事実であることがわかつてきつた。

津金 周子 氏

津金周子さんへ

柳沢 常子

津金さん、あなたが逝かれてから38年が過ぎました。  
あなたへの言葉は、もっと早く書かなければいけなかつたとも思えますし、還暦を迎かえた今だから書けるとも思えるのです。それほどあなたの亡くなられたことは、強い衝撃でした。それを機に、私たちは、夢や憧れ、山の魅力、登山、友情のあり方などを思い悩み、考え、私の進路、仕事を決めることができたと思います。

あなたといっしょに登った私たちの仲間は、ここ三十年あまりの間、子供達を連れたり、子供達が成人してからは、私たちだけで毎年山登りを続けてきました。そして、いつも思うのはあなたがここにいらしたらなあということです。



常念岳にて中央  
1958. 5

「津金周子さんとの出会いは、昭和33年、山岳部に入部した時でした。あなたは、野沢南高等学校を卒業し、信大教育学部第二類英語科へ入学したのでした。その年は、信大長野山岳部の女子部の活動が始動し始めた時で、あなたが入部されたことで、念願の春4月末の常念岳への新人歓迎合宿ができることになりました。常念岳の登りで、あなたは大きな荷物を背負って、バランスを崩してスリップし、止めに入った私といっしょに雪の斜面を少し落ちて、立ち木に挟まれて止まったアクシデントがありました。私は、そんな頼り無いリーダーだったけれど、あなたは何時の合宿にも参加しました。2年、3年部員の中にたった一人の新人部員でしたが、いつもにこにこして、ふーんという表情で私たちの話を聞いていましたね。夏山合宿を前に栗林さんが入部し、2年部員の中村さん、宮本さん、大塚さんと3年部員の私の6人で、剣岳～五色ヶ原～針の木峠越えの夏山合宿、八方尾根～唐松岳への冬山・春山合宿を共にしました。

唐松小屋直下の大きく張り出している雪庇をきり開いて、宮本、大塚のアタック隊員が進んで行った後、私と津金さんは、私たちを一番てこずらせた、5メートルほどの岩のでた雪の壁をカメラに納めた。春の常念岳から夏山、冬山とやってきて、私たち6人の力で、2700メートルのこの雪の壁に点けることのできた小さなピッケルの傷を二人で眺めた。津金さんは、黙ってカメラを赤サブの中にしまって、『フーン』と感嘆の声を漏らして、不帰の方を眺めた。一峰、二峰、と復習しているような様子だった。津金さんは、よく『フーン』と言うことがあった。あなたは、青磁色の厚い毛糸の帽子を振り振りアイゼンを雪に軋ませて下った。常念沢や真砂沢を下った彼女の足取りとはかけはなれた確実さであった。

例によって、合宿お終いの夜は、人生、幸福などなどなど、遅くまでいろいろな話をした。津金さんは、黒いコールテンのジャンパーを着て、彼女の発明による『コジキブクロ』(中には細々した私物がはいっている)をいじり回しながら、納得の表情で聞いていた。」(S34年 津金さん追悼文より) 昭和34年、秋山合宿を前にして、あなたが突然他界されたときは、私たちは、何を信じてよいのか分からなくなりました。私たちが、この1年半一緒に山に登り、鍛え合い、築き上げてきたものは一体何だったのだろうか。私たちも闇に吸い込まれるような日々でした。

その真っ暗な闇の中で考えて、いろいろ迷っていた私の仕事を決めることができました。教師になって、三十年近くを子供達と過ごしています。あなたといっしょに山に登った仲間たちみんなそれぞれ真剣にあなたの分も生きてきたと思います。

雪の常念岳に登った後、キャンプに戻って朝炊いた御飯でおじやを作り、安曇野を見下ろしながらみんなで立って食べた日の笑い声がまだ耳に残っています。

あなたの冥福を祈ります。

## 『彼女（津金さん）の山』に想う

中村 和美

昭和34年の夏山入山を三日後に控え準備に大わらわとなっていた7月22日の朝、彼女からこの速達はがきを受け取った。

前略 行かないことに決めました。私は後悔するかもしれません。それに私は行かない立場にもあるのです。小林さんの部屋に「克己心」という文字が貼ってありました。私は行くことが己れに克つことなのか行かないことが己れに克つことなのか考えました。何回も言いましたように私の山行は逃避なのです。何も考えなくたってただ登れば良いのだ登れば何とかなるだろう。もちろん登って何とかなることはありません。でも、それで十分だと思っていたのです。何とかなるためだったら山に登る必要はないと思っていた。でも今度は何とかしなければならないことが沢山ある。もちろん山に行かないからといって解決できる問題ではない。私はこれらをみんなおいて山へ逃げ込んでしまいたい。こんな我儘を考える立場にはないことはわかります。でも、今度だけゆっくり考えさせて下さい。結局山に対する根本的考え方を改めない限りいつもこんなことになるかも知れません。逃避の場を山に求めるのはもちろん山を愛するからです。根本的考え方といっても山を愛することが根本的なのですから・・・。いつかもっと話を聞かせてください。みなさんによろしく。本当に申し訳ないと思います。

書状読後、ふと、この前の春山合宿中、沈澱日、所在なくテントの中でソクラテス哲学を彼女と考え合ったシーンが思い出された。

ただ、この夏山合宿には2日後、宮下常子先輩の説得があって全行程参加されたけれど、次の秋山合宿実施直前の9月30日、彼女は、永遠の旅立ちをされた。 鳴呼

## きんもくせいが薫る頃

阿部 紀子

津金周子さんのご葬儀の日に、清水先生が、きんもくせいの花枝を持ってきてくださいました。信大の玄関の植え込みに咲いていた、きんもくせいです。その花枝から清らかな香りが漂い、悲しい気持ちが、いっそう深くなつたことを覚えています。

ですから私は、きんもくせいの花を見るたびに、津金さんを思います。津金さんを思うと、あのきんもくせいの薫りを思い出します。そのどちらも悲しくて、胸がいっぱいになります。

津金さんは、とても頭のよい方でした。でもそれを人に感じさせない心の豊かさを持った方でした。相手を思いやる優しさをいっぱいに持った方でした。いつもにこにこし、目をきらきら輝かせて人の話に耳を傾ける方でした。

津金さんには、とても温かな家庭がありました。土曜日になると、決まって帰郷していました。心の広いご両親、仲の良い弟さんや妹さん、家族の話をするときの津金さんはとても幸せそうでした。

私は津金さんに誘っていただいたて山岳部に入りました。津金さんと一緒に行った1年生の春山や冬山、2年生の新人や夏山は、懐かしい貴重な思い出がいっぱいです。特に冬、春山の雪洞や雪隠作り、ラッセルや食事当番は思い出深いです。

一度津金さんと、雲上殿に夜桜を見に行つたことがあります。私は胸をどきどきせながら坂道をおりてきました。でも、津金さんが一緒だったから安心でした。その時津金さんは、「杜甫の詩が素晴らしい。」と語りました。その日を境に毎昼夜休み、大学の構内で杜甫の詩集を読みあいました。今思うと津金さんは、中国の詩のもつ雄大さや大らかさに憧れていたのではないかと思います。

それから4ヶ月、きんもくせいが薫る秋の日に、津金さんが亡くなりました。臼田から駆けつけたお母さんと2人で、「なぜ」「どうして」とばかりをくり返しながら、津金さんにお別れをしました。悲しくて悲しくて涙があふれてとまりませんでした。

### 三石 純 氏

#### 三石純君との剣岳チンネの思い出

柳沢 勝輔

剣岳の真砂沢にキャンプして定着合宿に移ったのは夏山合宿も終盤であり、穂高から剣岳までの縦走を終えて、これから岩登りを楽しもうという段階であった。八つ峰や源次郎屋根、あるいは長次郎谷、平蔵谷から剣岳頂上へと一・二年部員を連れ歩いた後、上級部員は八つ峰の岩峰の側壁を幾本か登って体調を整えて、最後のチンネの諸ルートを全部やろうというところにきていた。



夜のミーティングは焚き火を囲んで行われた。少し離れた京大のキャンプからはロシア民謡など高尚な歌声が聞こえてくる。我が部のヤクザっぽい歌とは大分違うなどといいながらも、少なからず挑戦的であった自分達の姿にも、ある種の誇りみたいなものを感じてはいた。部員数も多く、上級生部員も充実していたので、こ

の真砂沢定着合宿では許されるだけ稼ぎたいと思っていた。袴津直行リーダーからチネ試登計画が示され、そのトップ・バッターとして私と三石君が指名された。

私が四年生で三石君は松本分校から今年三年に編入してきたところであった。彼とは善光寺の物見岩と一緒にトレーニングしたことはあったが、まだ十分に知り合っているという程ではなく、穂高から剣まで一緒に過ごしていても、先輩後輩の立場もあってか、彼はどこか遠慮がちであった。しかし、彼が小穴君と二人で編入部した時は、山岳部もずいぶん補強されたようで、期待されたのである。体格もよく、美男子であって好漢であった。その上、気持ちもおだやかで落ち着いている人であった。

チネの岩壁の取付点に着くと、三の窓の辺りにキャンプしている人達かどうか、もうすでに幾パーティかが取り付いていた。私たちは中央チムニーのルートをめざしていたので、先着の人達が登りきるのを待っていなければならなかった。前に登っている人達をもどかしい気持ちで眺めていたが、あまり時間がかかるのでチムニーの左側の凹角度面を試みることにした。私がトップでしばらく登ってみたが難しく、ハーケンの数が足りそうもないのであきらめて下まで降りた。すると、三石君が「俺にやらせてください。」と申し出た。私は無理だろうと思ったが、彼の背丈なら私には届かないところもいけるかもしれないと考え、試みやらせてみることにした。しかし、手がかりのない、のっぺらとした岩の面は、彼をも寄せつけず、不安を通り越して進退きわまる結果となった。「柳沢さん、落ちます！」というのに、「落ちずに降りろ！」とは言ってみたものの、もうだめだと見えたから、「大きく振られるから、足裏で受けろ！」と怒鳴った。最後のピンからトラバース気味に長く出ていたから、ザイルもそれなりに長く伸びていた。彼の身体が岩から離れると大きく振られ、しづかにザイルをゆるめながら、彼を地上に降ろした。

彼の打撲のために、ルートへの取り掛かりは大分遅れてしまった。私がトップで登ったが、背中を打っている彼にとっては、斜めに走っている狭いチムニーを登ることは大変つらかったに違いない。中央バンドに出ても、またまた待たされ、予定時刻を大きく過ぎてしまっていることにあせりも感じていた。最後のバンドからクラックを登る時は、ベースキャンプ帰着の予定時刻を過ぎていた。それに剣の定期便の雨が降り出し、岩場を登りきる頃にはドシャ降りになって、ナイロン敷物の不十分な雨具ではビショ濡れになるより仕方なかった。しばらく岩陰に入ってみたものの、雨をさけようもなく、池の谷を長次郎谷に出た。暗くなり始めた雪渓を慎重に滑り降り、剣沢に出る頃にはすっかり暗くなっていた。真砂沢キャンプに戻ると上級部員が捜索に出る相談をしていて、怒られるはめになった。

三石君はチンネで待つ間にいろいろ話をして、来年は山行合宿に参加できないかもしれない心配をもらっていた。彼は生物学専攻で、鈴ノ木岳にこもって調査観察をしたいのだという。卒業論文の研究だからそれを第一に考えながらも、なんとか合宿に参加するようになると、そんなことを話し合った。結局、彼は調査研究の為に合宿には参加できなくなってしまった。

大学卒業後は信濃教育会山岳講座の講師を務めた後、長野県山岳センターの指導主事になった。センターの仕事があけて、四月には学校現場に戻るという三月末、八が岳の雪崩遭難で亡くなった。

## 山形 文武 氏

### 山形文武さんへ

藤本 正二

私のアルバムの中に1枚の写真があります。（北アルプス雲の平でひと休みしている山形さんとのスナップで、小さなカメラで撮ったものなので顔も余り鮮明ではありませんが）山形さんと一緒に写っている写真は余りないので、どれも私にとってとても貴重で、特にこの一枚は忘れられない大切な宝物になっております。

新人夏の合宿のことであったと思います。縦走合宿半ばの一日、双六池でテントを張り、今日は雲の平まで日帰りの行程。それは合宿の途中のしばしの休息日のような日でありました。

新人メンバーは一人一人に先輩が何人か付いて空身で目的地まで行く。私は山形さんに連れられて行くことになって、今思い出すと何か近寄りがたい先輩と行くという事でとても緊張していたことを覚えています。と言うのは、山形さんとはあまり話す機会はなく、何回か、物見岩の岩登り訓練の時にザイルの結び方、足の運び方、登はん技術を2、3回程教えていただいたり、また山形さんの登っている姿を観る機会があっただけでした。当時私は松本の分校にいて、M先輩から長野にはすごい人が居るぞ、やま登りの神様みたいな人だ。と聞いていたからなのです。この日帰りの山行は普通ならとても楽しいものになるはずでしたが、1時間ほど歩くとだいたい休憩するのに、2時間歩いても休憩しない。前日までの重い荷物に比べるとサブザックの軽量荷物は何のことはないのに、前日までくたくたになって歩いていた折、のんびり出来るかと思っていたのがいけなかった。「目的地に着くまではなにがなんでも頑張り通して途中で決して休んではいけない。どんなに苦



雲の平らにて 右  
1963. 7

しいことがあっても、へこたれないで最後まで頑張り抜くこと、それを一番大事にしたいね。」山形さんは私の弱点をしっかり見抜いていたように思われて仕方ありませんでしたが、何の気なしにつぶやいたこの一言が、30年近く時がたっても忘れられないんです。

馬場島の河原で何日間だったろうか、くる日もくる日も、流れてくる遺品はないかと探し続けた。岩にレリーフを埋め込むために大岩を刻んだ。剣岳の方から「やあ藤さ、頑張ってるな！」と山形さんと柳沢さんが来るのを何度も夢見たことか。

大学を卒業してから早30年近くならんとしている。それなのに「やあ藤さ、頑張ってるな！」と言うこえがどこからか聞こえてくるのはなぜだろう。

人一倍、精神的にも身体的にも弱かった自分。目標めざして日々努力精進することを教えてくれた山形さん、例え今は努力の目がでなくとも、ゴールした時のことを夢見て一生懸命頑張ります。どうか何時までも何時までも私たちを見守って下さい。

「やあ藤さ、頑張ってるな！」

### 故 山形 文武君

福与 邦夫

ご両親が彼に「文武」と命名したことがよく分かった。まさに、文武両道に秀でていた部員だった。ソフト・ハード両面のバランスが均衡していて見事だった。型破り派が多い山男の中にあって、彼はちょっと違って紳士的であり、山への哲学を持って登山していた。

彼から直接聞いたわけではないが、彼の言葉で二、三思い出すことがある。

- ・信大へ来たのは山登りをしたいためである。
- ・山登りをして技術を身につけて、遭難者の救助にあたりたい。救助するには高度の登山技術が必須となるので、それを体得したい。
- ・ゆくゆくは空を飛びたい（パイロット）

あのようなことにならなければ、彼のことだからまちがいなくこれらの目標は達成したであろうと想像する。

お母さんは今なおご健在で、数年前に歌集を出されている。故父上も句作をされた。

吾子の逝きし山の嶺に今もなほ籠りてあらむわが慟哭の  
剣岳を仰ぐ小高き陽溜まりに吾子のレリーフは鎮もりてあり  
吾子の足癖のこりし堅き登山靴捨て難くしてオイル塗りつぐ  
子の墓碑に亡き夫の俳句刻みあり遭報の日の夢の如しも  
岩に座し吾子を思へばこのままに岩になりたき心地するかも

前途洋々だった21歳の文武君を、突如亡くされた悲しみと慰靈の歌に涙を誘われる。  
今年も中茨城市的母上から年賀状をいただく。90歳のご高齢というのに、頭が下がる。  
剣岳のドーム稜にて、岳友柳沢君と共に消えていって35年目になる今年も、文武君は我々  
の心の中にずっと生き続けている。

柳沢 進 氏

故 柳沢 進 君

福与 邦夫

「太陽」なる愛称で、部員みんなから親しまれていた柳沢君。

まん丸い顔と人なつこい笑み。

大きな、頼りがいのある体格。

口もとからこぼれるユーモラスな話題。

太陽とはまさに彼にピッタリの愛称である。



夏山合宿 チンネにて  
1964. 8

今年も父上（英夫氏）から年賀状を頂く。「昨年33回忌の法要を営みました。」と書かれている。そうか、もう33年前になるのかと改めて思う。最愛の息子を剣岳に失って、今も尚息子を哀惜してやまないご両親の心情が伝わってくる。賀状の交換をつづけること34年、その都度「太陽」の愛称への感謝の一文が書き添えられている。

「太陽語録」の中で思い出すことの一、二。

岡村部員と二人で春三月に、南岳から前穂高岳をアタックして途中でビバークして帰還したときの第一声。「俺たち、みんなの顔が見たくて風雪の中を帰って来ました。」……。出迎えのみんなと涙、涙の握手。感極まって抱き合った光景が忘れ難い。

合宿中、ユーモラスなことを言ってみんなを笑いに誘う。「人間、針金のようなウンチをしとっちゃだめだじ。でっかい、大根のようなヤツを一つ、ドカーンとぶっ放すようじゃなきゃ。」スケールの大きな人間像を追い求めていた彼独特の、面白い表現が忘れ難い。

昭和39年8月23日、岳友山形君と共に剣岳に消えた太陽。

実世界でやれなかったことを、そちらで存分にやり通してくれていそうな気がする。そして実際の太陽の如く、周囲を明るく照らしてくれているにちがいあるまい。  
でっかい太陽、全人類を照らす太陽・・・・。やんさんは今も我々の太陽である。

小川原五郎 氏

故 小川原 五郎 君

福与 邦夫

事故を伝える当日の新聞記事が今も手許にある。

昭和47年4月28日午前1時、長野市稻里町での国道交差点での、思いもかけぬ乗用車とトラックの衝突事故のために、助手席に乗っていた小川原君は不慮の他界となった。

「関係項」(遺稿追悼集)が今机上にある。一旦ひもとくとなかなか途中ではやめられない。

29歳で亡くなるまでに、よくこれだけのことを書き留めておいたと改めて思う。美術論、文学論、海外体験、書簡、夫婦愛。どのページを開いてもすぐに時間が過ぎる。そして彼の「年譜」を見て、これだけの豊かな経験を持ったことに驚くことしきりである。



1971年2月飯綱山にて

だれもが、ゴロー、ゴローと呼んでいた。そう呼んでもいい大衆的な雰囲気を持っていた。山での彼は強かった。昭和38年夏の南アルプス全山縦走(甲斐駒~光岳)では、重量のあるザックを担いで16日間黙々と歩き通した。当時は、火器は持たず全て現地で薪を燃やしての煮炊きだった。水場は遠く、雨天では薪は燃えず、粗衣粗食となるも、誰も一切文句なしでただ歩く。でもこれくらいのことは彼にはなんでもなかったようで、いつも笑みがこぼれていた。すごい山岳部員だ、という印象をだれもが持った。

海外に雄飛して、数々のユメにチャレンジしようとしていた矢先の他界が惜しまれてならない。もし在世なれば、フジモリ大統領ばりに、彼も世界のゴロー大統領になっていたようだ。その早逝を惜しむや、切。

ゴロ一

野口 忠世

拝啓五郎殿 久しぶりだね。今は1998年1月で、長野ではもう2週間ばかりするとオリンピックが始まる。五郎がそちらへ行って30年近い歳月が流れた。私は50歳半ばを越えおめおめと生き時々過去を振り返り懐かしんだりするようになった。私のイメージの中では五郎は20何歳かのままであり、今年サッカーのワールドカップ参加チームの若いメンバー

の中に五郎の印象を残す若者の姿を見た。艶やかな輝く頬と静かな眼、強力のような腕と厚い胸板、無邪気な笑顔といったところだろうか。この30年、特にこの数年間の出来事は多くの悲しみとともに信じられないような出来事ばかりが起きている。特に私たちが血をわかせた青年期から幼い子ども達の年代では「あるまじき」とかつてなら当然考えられたことが、分からなくなってしまった。この子ども達を育てたのは私たちの年代だ。途方に暮れて独り天井を見つめてばかりいる。かつての日にはこんな時五郎の声がかかった。「何してんだ？ 飯でも食え！」飯を食っているとサワサワと地鳴りの音が近付いた。あの古い長屋は地震計よりも早く確かに松代地震の接近と大きさを報せてくれた。学生時代のある期間私たちはほんの一枚の障子を挟んで生活していた。そこで話し、そこで喰らい、そこから街へ出掛けたり山へ出掛けたりしていた。雪の夜に「岡鹿之助の絵のような里島発電所」を見に出掛けそれからくらい旭山に登った。またある時はバードラインを雲上殿から飯綱山へと歩きながら夜空や芋井の村の燈にむかって吠えたりした。たった30年の間にこれらのものはことごとく消えたり蝕まれたりしてきた。旭山の松は松食虫で瀕死の状態であり、バードラインは地附山の斜面はなくなった。同様にあの懐かしい西方寺の古い長屋もなくなり、教育学部へ至る道も広がり懐かしい本屋や食堂やどら焼き屋の匂いもなくなったり。山行で印象的なのは冬の槍ヶ岳周辺へ行ったときのことである。槍を中心に西鎌へ東鎌へとみんなで雪を楽しませてもらっていた。東鎌へ行った日には曇天で午後から雪が降りはじめた。大槍から槍ヶ岳の鞍部へ稜線を辿るころにはすっかり薄暗くなり視界はゼロに近くなっていた。左側は槍沢へ滑り落ちる斜面が感じられていたが右側は平らな雪原がどこまでもつづくような歩きやすさが感じられていた。私はすっかり見えなくなったり雪目と楽な方へと頼る気持ちに引かれて右へ右へと歩いていた。後へ追い付いてきた五郎が「オイ、野口どこへ行くだ！」と声をかけた。今でも私は時々その時の声を聞くような気がする。私が今歩いている現在の世の中でも私は霧の中にいるようだ。五郎は社会人から教師になりたくて学校へ戻ってきた。常に燃える思いがあり「生きること」を楽しみにしていた。山に行く時も、土方をする時も、アメリカにわたった時もそこで自分の存在を明らかにしようとしているように見えた。当時のアメリカでは日本人の農業研修生などは馬鹿にされこき使われ差別されていたようである。五郎は全国から派遣されていた研修生たちを励ますと同時に組織してアメリカ人雇用主達と交渉権を獲得する努力をしたのだ。今、学校の子どもたちが死を望み殺しを痛みや悲しみとも思わない時代を作った私たち教

師である。「オイ、どこへ行くつもりだ！」時々そんな声を聞く思いがする。

同じ山行で、モチの脚は限界にきていて大将は槍からの脱出を決意した。最後の横尾から沢渡への行程は五郎も私も荷物部隊で先行していた。思わぬ前日の雨が梓川を雪原から濁流に変えた。夜中に晴れ月が出た。私たちは午前3時の梓川の徒渉から行動を開始することになった。腰までの川を渡るとオーバーズポンはバリバリと凍り付いた。上高地を通過したのは10時頃であった。雪が腐り一足一足深い雪の中へ転げながら、私たちは心の貧しさを感じながらも苛立ちとげとげしく言葉を荒げていた。疲れもあったし腹もすいていたが心配もあった。果たして車を呼べる時間までに沢渡へ辿り着けるか、午後になれば鎌トン前のブロック雪崩が恐ろしい。歩くのをやめる訳にはいかなかった。五郎は強かった。口を挟まず先頭を買って出た。この日私たちが山吹トンネルに辿り着いたときすでに夕闇が訪れていた。五郎と私は沢渡へ走り車を呼んだ。最後のコーヒーを沸かして本人を待ったが2時間過ぎても本人は着かなかった。車も来なかった。私は再び山吹トンネルを戻り入り口で疲労困憊して声もなくうずくまっている本人の黒い影を見付けた。五郎はいつも側にいて頼もしく有り難い人だった。私が遠山谷から大町へ転勤の時、彼はトラックを持って駆け付けすべての引っ越しをしてくれた。亡くなったのはその年なのだ。

## 加藤 一作 氏

### 一作を想う

1967年10月9日正午

加藤 一作君

前穂高岳北尾根四峰甲南ルートに逝く

これは、彼の追悼・報告集の題である。

10日間の秋山合宿の第9日目。明日は下山となる前日のことである。その日から、やがて30年になる。はからずも、前日は雪で前穂高四峰の登攀を中止し、快晴の9日に登攀ルートの変更を行い、彼は甲南ルートに挑んだ。前日の雪さえなければ彼は、この

ルートに挑むことはなかったかもしれない。10月8日は私がこのルートに登る予定だった。彼の体調がよく、ルートの間違いがなければ…。すべて、「…たら、…れば」の結果である。

1965年4月、一作君と市野史明君と私は教育学部松本分校に入学した。学校前のバス停留所で奇しくも一緒になり、愛知県と岐阜県という近くの県の出身ということで親しくなっ



信大妻科寮にて  
1965

た。4年間の大学生活で何か真剣に取り組めるものを探していた私は、2人が山岳部に入部することを知り、入部することにした。先輩からは「松本の三バカ」と言われ、部会がある度に、先輩の藤本さん、上条さんと共に長野までの2時間の汽車の旅をした。夜は部室の前の飲み屋「大関」で梅割とモツ煮を味わい、泊まる場所は各々長野の先輩の下宿であった。次の日は物見山の岩登り訓練や日帰りの山行である。この「三バカ」はなかなかのしたたか者で、「長野の同級生には負けないという強い信念(?)を持ち、松本市の郊外までの駆け足や、運動場でのトレーニングに励んだ(?)ものである。長野へ行けば焼酎があったが、松本では、藤本先輩の家の話や合宿の準備に明け暮れていた。

今から思えば、一年365日のうち、何日間も山に入れたものだ。

1965年 4月下旬～5月上旬 新人歓迎合宿 上高地

5月 妙高山 錬成合宿

6月 八ヶ岳 赤岳

7月下旬～8月上旬 穂高涸沢定着合宿。夏山縦走

8月下旬 刈岳 定着合宿

10月初旬 秋山定着合宿 穂高岳周辺

12月下旬～1月上旬 冬山合宿 遠見尾根より鹿島槍ヶ岳

1966年 3月下旬 春山合宿 烏帽子岳一双六岳－槍ヶ岳－横尾尾根

5月 裏銀縦走

6月上旬 新人歓迎合宿(SAC合同) 横尾B C

7月下旬 夏山縦走

8月中旬 刈岳定着合宿

10月上旬 個人山行

11月下旬 唐松岳

12月下旬～1月上旬 前アルプス縦走

1967年 3月下旬 唐松岳－槍ヶ岳－笠岳－神岡温泉(父の怪我の為不参加)

4月下旬～5月上旬 新人合宿 横尾B、C

6月上旬 針ノ木岳錬成合宿

7月下旬～8月上旬 夏山縦走合宿(教育実習の為不参加)

10月上旬 穂高涸沢定着合宿

(追悼文集より)

この間にも、物見岩や松本周辺の岩（鳥帽子岩等）へ岩登りの練習に出かけたり、当時、大学紛争の真っ盛りで、自治会によるストライキをいいことに山に出かたり、美鈴湖や長野スケートセンターへスケートに行ったりしていた。「勉強は」というと、それなりにやっていたとしか言いようがない。一作は英語科に属し、研究室仲間や女性たちと楽しくやっていたように思う。彼は、結構理論派で、私には「ゴタこいている」という感じがしたが、本音は真面目で集中力のある努力家であった。

彼について一番思い出されることは、1年生の時の冬山合宿である。

我々下級生は、上級生の鹿島槍ヶ岳へのアタックのため、B、C、からC1へのボッカに精をだしていた。合宿何日目かは定かでないが、彼の体調はすこぶる良くなかった。C1からの帰途、ついにバテテしまった。「ガンバー」「ガンバー」の声をかけても、足は動かない。帰りで荷物は軽いはずであるが、前に進まない。雪の中に倒れ込むようにしては、雪を口にするたびに叱咤激励の声が飛ぶ。ついにリーダーの柴田さんは、非常食のチョコレートを「食べてよい」と言わされた。我々の嫉妬の目を横目に、彼はチョコレートを1個食べた。5分間も経たないうちに、歩きだしたというよりか走るように彼の足はベースキャンプに向かって進んだのであった。ベースキャンプに戻ってからは全く日ごろと変わらぬ彼の姿があった。これが、後々までチョコレート事件として語られていた。

今、当時の写真を見ていると、眼鏡の奥に輝く彼の優しさと厳しさ。喧嘩もしたが、共にザイルで繋がったあの頃。酒を酌み交わし、遅くまで語った若かりし頃。岩から落ちそうになった、落ちた恐怖と助かった安堵。飲みたい水も十分に飲めず必死になって登った山々。合宿の最終日に飲む少しばかりのウイスキー。あの娘は可愛いなどと騒いだ下宿・合宿中のテントの内外。山のことばかりでなく、私生活でも色々教えていただいた先輩諸氏。真剣に山岳部や山について話し合った同輩や下級生諸氏……。

何から何まで夢・夢・夢……の今の私ですが、山岳部で培った精神的な強さや過去を大切にしながらも常に先に向かって進むことの大切さは忘れていない。

「加藤一作」が生きていたら、どんな人生を歩んでいるか。

この文章を書きながら改めて「一作」の冥福を祈るとともに、これから的人生に新たな力を注ごうとしている。

吉安 尚夫

## 加藤 一作君へ

「もう一度行き会いたい」「もう一度一緒に山行したい」

藤本 正二

### {分校時代}

○一作君との初めての出会いは、私が分校生二年目の四月であったと思います。

加藤君が市野君、吉安君と共に入部したいとの申し出があった時のこと。彼は私と同じく教育学部英語科に所属していたことから何かしら親近感があり、素うどんを学生食堂で食べながら色々と話し合った。高校時代のこと、なぜ山岳部に入ろうとしたのか?講義のこと、・・・はっきり覚えていないので詳しくはわかりませんが意気投合したというか、何か兄弟が一度に増えたような感じがしたこと覚えています。

○「分校での電信柱の岩登り」松本、の現在信州大学付属幼稚園のある所に教育学部の分校がありました。休日には長野へ行き物見岩での岩登りトレーニングをするわけですが平日には分校の校庭の片隅に在った電信柱の岩登りを一作君と良くしました。電信柱で岩登りを・・・ちょっとおかしいと思われますが。

ハーケンを柱に50センチ程の間隔で打ちつけておいてあせみをかけながら一人が下で確保し、上部まで登っては降りる。交代して又登る。体育のT先生がこれを見て良い成績を付けてくれたり、「せみみみたいだな。」と言ったことが記憶に残っています。二人とも心はアルプスやヒマラヤの山々の中にあったようでした。

### {長野時代}

○「彼とテニスをしたこと」長野の教育学部に在ったコートで良くテニスをした。決まった時刻にする訳でもないので、ぶらりとコートを覗いて誰かが居ると一緒にプレイする。大学に来て授業が終わると、山岳部の部室にいるかテニスコートにいるか、また桜井町の食堂にいるか、アルバイト先とかパターンが決まっていました。

○「レリーフを刻んだ事」Y先輩、M先輩の慰靈祭が行われた昭和41年の夏のこと、私たち先発隊はとりあえず十数人分の食料、テント、燃料を松本駅から列車に積み込んで運び、いつもの山行とはだいぶ違った雰囲気があったことを思い出します。馬場島よりどのくらい行った所か記憶が薄れてしまって思い出せないが河原の巨石にレリーフをはめ込む作業、交代でたがねとハンマーで力いっぱい石を刻む作業をしました。

○「夢の中に現れる一作君」寮生活の食堂や暗い風呂場の中で会話、何度夢の中に現れたのか数えたことはない。ただいつもきまって現れるのは、どうも特定は出来ないんですが同じ場面のような気がします。「今でも心の中に生き続ける人」「一作君!」「もう一度行きたい。」「もう一度、一緒に山行したい。」

## 加藤一作君のこと

市野 史明

昭和42年10月、3年部員で前穂4峰甲南ルートオーバーハング乗越し、途中にて事故。私も前年と、この年に攀ったがハング部分は陽当たりが悪く、岩の割れ目も落ち着かず、ハーケンが緩みがちで、そっとアブミに乗る状態で気持ちの悪い場所であった。

彼にとっては、あまりにも短い山登り人生であった。しかし、大学3年までの山登りと学部生活は、彼の人生の中で最も充実していたのではないか。思考は純粹で、性格は繊細かつ些事にとらわれない粘り強い男であった。

逝った人の齢を数えても仕方がないが、今、彼が生きていたらと思う。

教育者になっていただろうか。なっていたなら独自の理念で子供達に大きな影響を及ぼしていたであろう。

山登りはどうしていたか。卒業と同時にあまり登らなくなったかもしれない。酒の機会が多くて体重が増え西郷隆盛のような男になっていたであろう。しかし、OB会事務局の中心となって、きっと、組織を盛り上げOB、現役の中心となっていたであろう。

山に行く機会の少ないOBの重い腰を上げさせ、彼独特の雰囲気で議論の渦を作り、現在とは違った方向に仕向けていたかもしれない。

今ではすっかり遙かになってしまった山脈を慕いつつ、加藤一作君という未完の大器のまま逝ってしまった男と久し振りに会った気がする。

# 消息名簿



## 中島福男

もうかれこれ四十四・五年前になりますが、名簿の最初の10人程の皆さんと一緒に、高瀬川から東鎌尾根～穂高への縦走や、美ヶ原の大文字岩？でロッククライミングに興じたことなど、ありありと思い出します。お陰で、探求心と足だけは健在で、山歩きの延長線上で出会ったヤマネ研究がライフワークとなり、調査と称しての山歩きを楽しんでおります。

拙著「森の珍獣ヤマネ」も意外と好評であり、今また「日本のヤマネ」に挑戦中で、日本各地をとび歩いております。

## 帯川文子

田島さんからの部誌についてのハガキを手にし、若き日々の山行きの思い出が一度に胸によみがえり、なつかしさがこみあげました。

山を想えば 人恋し、 人を想えば 山恋し……

鹿島槍を中心とした後立山連峰への旅。足がすくんで、進むこともしりぞくこともできなかった八峰キレット…ふと、山岳部でつれて行ってもらった剣岳の岩場を思い、つめたさでとべないのか、雪の上で「パタパタ」羽ばたいていたチョウを鮮明に思い出した。また美ヶ原でのロッククライミングで、身も心もうちふるえた事なども思い出した。ふとわれにかえり静かに顔を上げたら、ふるえる足を運ぶ岩場にしおらしく咲くイワギキョウ。抜けるように青く、深く澄みきった紺青の空が私の目に心に迫った。また、可れんな花々の生命力の強さに心打たれ、日ごろ失いがちな人間らしい清らかなやさしさを私の心におしもどしてくれた。

## 浅野井 哲

山岳部時代はトレーニングや合宿など部活動に不熱心で劣等部員でありました私の、最近における山とのとりくみについて報告します。

30代に入り山から遠ざかり53歳の時山登りを再開しました。また基本から始めようかと思い、朝日カルチャー教室の長谷川恒男氏を講師とする「中高年の山遊び教室」を受講しました。その時の同期生30人位で長谷川さんを名誉会長に「ほうけん山の会」を結成、冒険ではなく、実技研修を春山の宝剣岳で行いそれでつけた名前です。私はこの同好会を中心に仲間と山へ登ったり、酒をのんできました。その後長谷川さんはウルタルⅡ峰で遭難死しましたが、彼はアルピニストだけでなく青少年や中高年の登山指導にも熱心でした。

また最近は財団法人「日本万歩クラブ」のリーダー活動に力を入れています。健康のための一日一万歩運動を古くからすすめてきた会で、中高年を中心に二千名位の会員がいます。私は峠と百名山、街道、温泉などをつないだ峠シリーズや、冬山初心者向けの安全なスノーハイクなどの例会を企画実施しています。環境庁の自然公園指導員にもなっていますが特に活動はしておりません。

万歩クラブでのボランティアとしてのリーダー活動は現在の私の生きがいともなっていますが、これも百瀬氏、田島氏を始め山岳部時代の先輩、同僚諸氏の当時のご指導のおかげと感謝しております。12月には万歩クラブの人や妻も一緒にエベレスト街道トレッキングを予定しています。

#### 和田（中条）嘉代子

晩秋の頃、志賀から山田牧場へ車で越えました。紅葉の見ごろで、美しく彩られた山々と、はるかに望む北アルプスの眺めはすばらしいものでした。澄み切った青空にくっきりと描かれた稜線と、余人を寄せつけぬ威厳に満ちた山肌を見ていると、いつも思い出されるのが昭和29年の夏休みに燕岳から槍ヶ岳へ縦走した日々のことです。

コップ一杯の水で7時間も歩き通し、口の中が乾ききってしまったこと。メインの槍へのアタックのその時、折あしく台風が強くなりいったんは中止と決まったものの、どうしても諦め切れずに決行、風雨の槍の頂上にしがみついて立った喜び。雨にけぶる360度の雲海に、みんなで大声で叫んだこと…等々。小梨平までの下山路では激しい雨にたたかれて全員ビショ濡れ、文字通り濡れネズミでしたが、青春の情熱（？）でいつの間にか乾いてしまったように思います。

「山岳部員」とは名ばかりで、この登山が唯一の活動でした。でも、山の怖さと魅力を充分に教えてくれた山行だったと、今もあざやかにあの日々のことがなつかしく思い浮かんで来るこの頃です。

#### 曾根原 久子

タイムスリップしたような突然のなつかしいお便り、びっくり仰天いたしました。松本の住人になって20数年余、四季折々に移り変わる周囲の山々を日々眺めながら、時々青春の頃の思い出に浸ることもありました。

ずっと昔、中条先輩から誘われて美ヶ原行に御一緒させていただいたのを皮切りに、山登りに興味をもつようになつたものでした。中学校の教員時代に生徒たちに引率されて…

燕岳登山を数回経験した位のものですが、学生時代（多分S.30年頃）の晩秋、西穂頂上から眺めた夕日は最も印象的でした。これはいつも自慢話しにしてきました。最近は年齢と体力に合わせてトレッキングで近くの自然を楽しんでいましたが、目下腰痛と悪戦苦闘。夢よ再び…元気に歩きまわりたいと願っているところです。

沓掛（長門）経子

卒業後埼玉で教員生活を過ごした私には、西穂の夕焼けが忘れられません。  
這松に寝ころんで時の流れを肌で感じ、清水悟郎先生の説教は風と共に通りぬけていました。

もう一つ

野兎を追いかけた菅平キャンプです。帰り、須坂に下る道に迷い笹こぎ、最終電車にとび乗ったのは2人だけでした。

「ふる里の山は遠くにありて思うもの」 山も友も遠い存在でしたが、上田に落着いて今は、ゆっくりペースの山を楽しんでいます。

塚田幸子

何十年ぶりかで学生時代の山の記録をとり出してみました。その中には自然の中にすっぽり入って動かされ、動いた日々のこと、山仲間のこと—素直さ、無邪気さ、厳しさ、思いやり、淡い恋心などがいっぱいいつまっていました。思ひがけなく心をゆり動かされ、感激の時を持つことができました。私の頃は女子部員が少なかったので、いつも男子部員の行動の一部に入らせていただくという山行でした。今でも思い出すのは、南岳での朝の食事当番の時にみた夜明けの空です。一瞬クリスマスカードの幻想的な美しい風景を思いました。自然の底知れないすばらしい感動の場面でした。

坂西澄子

涸沢の思い出

はじめての経験、涸沢での秋山合宿の思い出は、あれからずっと私の心を彩り、また私の日常生活の力になってきました。

その一、何か代わりになるものはないか

若いといえど、涸沢までの道のりは辿り着いたという感じ。先ずは一服と腰を下ろす。喫煙者の男性諸氏、お互いに「タバコないか。」誰もなし。と、秋の午後を迎えた前穂に

向かって呼びかけた。「タバコー。」バにアクセントを置いたいい声が今も耳に残っています。その後どうしたか、「まあ、これで間に合わせるか。」と枯れ草などむしゃらです。何か他のもので間に合わせられないかと応用を考える時、ふと浮かぶ涸沢の情景です。

その二、先ず、何をするか。トイレづくり

現実は厳しい、先ずトイレが大事なのだ。やさしい男性諸氏、スコップをかついで出かけ、女性も安心のトイレを作ってくれた。以来掃除の苦手な私もトイレだけはと心がけています。

その三、そんなに神経質になることはない

常温にさらすこと〇〇日、ひからびてしまった竹輪だってめったに食当たりなど起こすものではない。何事もあまり神経質に考えるな。この経験は、生来のんき者の私に輪をかける結果となつたらしいが—。

——まだまだあるが略——

こうして生活の節々で、若き日の涸沢合宿が甦ります。

加えてあの時のみなさんに、あれからずっと、それこそ生涯にわたっての友としておつき合い頂いてきたことに感謝しております。

### 饗 場 邦 光

私は山岳部には僅か1年しか在籍しませんでしたので思い出も少ないので、今でも脳裏に焼き付いているのは昭和32年3月の北アルプス春山縦走です。吉沢健さん、久保田寛さんにしばられたこと、口の大きい人なつこい目をした小林盛男さん、宮下常子さんの顔などが思い出されます。そのとき私は用事のため槍ヶ岳から下山し穂高まで行けず以来私の頭から離れなかった山行ですが、55歳の夏にやっと憧れの大キレットを通過し空白のページを埋めることができました。サラリーマンになってから50歳ぐらいまでは暇と金がなくて山には行けませんでしたが、最近はスキーを含めて年間20日間程度はいっておりまます。老化防止のためこれからも続けたいと思っております。

### 小野山 尚

学校を出てから37年、はじめて山岳部のニュースに触れました。山に御一緒した方々の御名前を見て、ああ懐かしいな、と声をあげてしまいました。山にあこがれる気持ちは変わらず、エベレストパノラマトレック9日間という旅行から11月15日に帰ったばかりです。兄の仕送りと奨学金、アルバイトでようやく通学しておりました。冬山合宿の費用が捻出

できず、小林盛男リーダーに連れられて兄に頼みに行き一蹴されたことから、山岳部を辞めることにした当時を思い出します。トレーニングで西校前の坂道を駆け上るとき、ランニングのせいではない動悸も感じたものです。

お陰様でランニングは今も続いており、山行の他に、スキー行や年一回のフルマラソンなどに役立っています。

故人の中沢君とは一つの毛布の袋に一緒に入って寝た仲間です。船窓で彼が滑落したとき、救急担当として角瓶1本を消毒のために使ってしまったときの先輩諸氏のうらめしそうな顔が忘れられません。

#### 滝沢（若狭）一男

青くめぐる里山の向こうに、真白く雪をいただく北アルプス（後立山連峰）の山並みを眺めて育って、いつかあの山々へ登ってみたいものだと憧れを持っていました。

今は夏休み等に、家族や友人とゆっくりと、富士山や北アルプスの山を歩いています。高山植物をながめ、山の写真を撮りながら、自然を楽しんでいます。

#### 加藤 晋

小生、信大松本教養課程1年の時、春山合宿で横尾尾根から槍ヶ岳アタックの帰途大喰岳だったか南岳のどちらかで滑落左足首脱臼腓骨にひびが入り、皆の助けて沢渡までやっと帰れました。長野工学部へ移ったときは松葉杖にて登校、秋の合宿で復帰して滝谷へいきましたが、恐くて以後ハイキング程度となっていました。工学部二年か三年のときスキーを使って火打岳へ妙高岳から登りましたが、当時工学部の顧問であった山口教授と一緒しました。当時の田口駅から馬そりでザックを杉野沢まで運びましたが、妙高と戸隠の間の誰もいない神々のおわすと思える真白い斜面をシールをつけたスキーで歩いたことを思い出します。以後はハイキング程度で山行はほとんどしておらず現在に至っています。2月22日から運輸省航空事故調査委員会の委員に任命されて目下ややバタバタしております。

#### 山口 秀二

中田邦夫さんとは一緒の山行は無かったと思いますが、菅平での送別スキー合宿の時、同郷であり2人共スキーには自信が有ったので、山頂まで登り、次回は奥志賀から苗場の方へ山スキーに行こうかと話しましたが、実現しませんでした。

中沢俊夫さんとの山行で一番思い出に残って居るのは、裾花川上流の八方睨の裏から登っ

た時の事です。沢に入ったらイワナが沢山いてびっくり！当日は先を急ぐせいか食糧にはなりませんでした。たしか中沢さん、中村和美さん、若狭さんとの4人のパーティだったと思います。歩きはじめて、すぐ中村さんが石の上で足を滑らせ、川の中に尻もちをついてしまったこと、ビバークの時落葉の上のわずかばかりの雪を集めて沸かした、落ち葉入り湯をすすった事は、忘れません。山頂に着いた時食べるものが少なく、空腹が満たされず、若狭さんの分までいただいて食べたと思います。

その頃の僕はあけぼの寮に住んでいましたが、夕方になって窓の下で山口！と大きな声で呼ばれる事が毎々あり、その夜は決まって、中沢さんはゴンドウの居酒屋「真澄」につれて行き、閉店後はかなりの高齢のママの自宅へ行って、夜食をいただいてから帰るのが常でした。

片岡格さんとは山行よりも、よく下宿におじゃまして、洗面器の中でコネたギョーザともお好み焼ともつかぬものを食べた思い出が有ります。ともかく、いつも空腹だったようですね。

#### 藤井哲士

より“身近な山”を求めて富山県より信大に入学。山と山岳部は大学生活の大きな位置を占めた。今は、大学時代の山行の一つ一つが、ただ美しい思い出。十年ほど前より体調をくずし、上高地程度しか歩けないことが思い出をいっそう美しいものにしているのかもしれない。特に印象的な山行は、1961年度春山合宿と1962年度冬山合宿。前者は船窪一白馬縦走。リーダーが私で井原、峯村、下倉君の計4名が縦走隊。八方サポート隊はリーダーが石井君で川端君ら計8名。井原君のまとめによると長野発が3月10日、帰着が31日。忘れられないのが3月23日。朝6時45分種池小屋発、キレット小屋に着いたのは夜8時15分。小屋直前、吹雪と闇は、今も鮮明。後者は、槍ヶ岳北鎌尾根、独標側稜からの登攀。小穴さん（故）がリーダー。12月23日発、帰着1月10日。卒業後初めて読みかえしてみた私の山行日記によれば、アタックは1月3日。12時すぎ槍の頂上に立ったが、風雪が強く急いで下る。が風雪ますます強く次第に疲労、日没そして暗闇、A君の転落（無事帰隊）等で7時半ビバーク決定。「ツェルトをかぶってホーブスをたけばそれでも生きかえった気持ち」「ツェルトについた雪がとけて背中を流れる。凍るような寒さが全身をつつむ」「ながい夜の思い出は長く残る。」等々のなぐり書き。決して忘れられない思い出。私にとって鮮やかな山岳部の1ページ。

## 野 村 昌 男

柳澤、山形 とうとうヒマラヤのラトナチュリ（7030m）のピークに立ったよ。剣岳の頂上で柳澤とザイルを解いて、夢を語り合ったな。君はこうした岩登りより、のんびり花を見ながら家族で登るような登山をしたいと言っていたっけ。

ある夜テントの中で、ヒマラヤへ行く夢を語り合ったとき、このまゝ登山をつづけたら必ず死ぬという時引き返すかどうか議論したとき、君はピークが見えてれば、死んでも登ると言っていたっけ。

今はもう、遠い昔の話になってしまった。

剣岳の頂上で語り合った2日後、帰らぬ人となってしまった。

君達に見せたかったな。ヒマラヤは雄大だ。ものすごくきれいだった。君達の分も楽しませてもらった。ありがとう。

## 柴 田 哲 也

高校の時から山岳部に所属し、あちこちの山や岩に登って来た中で一番心に残っている風景は、20歳の冬山で西穂高岳から奥穂へ向かう時、長い間チンデンした天狗のコルから見た月あかりの前穂、明神の稜線です。すこし前までは「あの時写真機を持って行けばよかった」と思っていましたが、この頃は、写真にとらなくてよかったと思っています。写真がないからこそ、今でも心の中にあのすごい風景をはっきりうかびあがらせることが出来るからです。今も山に行っていますが、40歳すぎ頃から山に対する見方考え方もずい分変わりました。これからも山と人を大切にし山登りをしたいと思っています。

## 近 藤 恒 昭

白馬岳から北アルプス縦走、穂高岳にぬける14日。鹿島槍で体調をくずし遠見尾根と共に下山してくれた福与（下倉）さんのことは、一生懐かしく忘れられません。山歩きの仕方もおぼつかない私は、亡き小穴さんや下倉さんに静かに温かくおしえてもらいました。以来、大学を卒業しても山歩きは今日まで続いている。今は高遠にいますので千丈ヶ岳、北岳など主に南アルプス縦走しています。なつかしい山岳の友との出会いで奥深いところで私の今は支えられています。

## 駒 井 浩

当時の山の日記から抜粋します。

なぜ山に登るのか？人間とは何かをせねば生きておれない。否、生きてはいるかもしれない

ないが、何かせぬおれなくなる。「登山」は、その「何か」という目的に余りにもピッタリしており、ただハイキングに行くのとは違って、たとえ自分を枠の中にはめ込んででも行うのである。

束縛のない生活というものは、時に理想として描いてみても現実にはあり得ず、しかも仮にできたとすれば、退屈してしまうから、人間は常に何か苦勞の種を探し出すのだ。

「山」は苦しく、楽しく、面白く、時にはつまらなく……etc.つまり非常に密度の濃い生活が送れるのである。だから登山者と山岳部員とは、かなりの違いがあるので。

1968.5.20（月）

ダダッピロイ下宿にて

宇都宮 昭 義

皆様、大変に御無沙汰致しております。

上高地の夏テンにもS.63年に、奥又出合に一作君の21回忌として行って以来、穂高の姿も見て無い位すっかり山とも縁遠くなってしまい、今は、夏はゴルフ、雪のシーズンはスキーで遊んでいます。それにつけましても、各学部山岳部から信大山岳会統合へと、信大山岳会の活発な活動期に、良き先輩、同輩、後輩に恵まれて学生時代を送る事が出来た事、誠に有難かったと、今、しみじみ思います。

聖 成 秀 次

#### 「心に30年生き続けている合宿」

少人数・短期間であったが、中味が濃く得るところの多かった山行、それが30数年前新人で参加した遠見尾根冬山合宿だ。「大将」と親しまれたリーダー下倉さん（現福与さん）の、行動時は胸までのラッセルに「ちっとも進まねえじゃないか！トップ交代！」と最後部から大声でハッパをかける等震える程恐く、一方沈澱の時はテントの奥でシラフに腰かけてニコニコしながら冗談を飛ばし、雪の中で相撲とってたわむれる等みごとな変身、また体力の乏しかった私をテント整備との名目でボッカからはずす思いやり、そして合理主義優先の現代では考えられないトレースをはずしての苦しいラッセル等々、メリハリあるリーダーシップにしみじみ感銘を受けた。

また強い意志と正義感を持った金井さん、多くを語らない静かな佐藤さん、くだけた理論家の小川原君と個性豊かなメンバーに恵まれた。

卒業以来30年誰ともお逢い出来ないが、あの思い出はそのまま大切にしまっておきたい

気もする。

そして高山村に住居をかまえた今、通勤途中五竜、白岳、遠見尾根を遠くに見る度、あの合宿が鮮明に思い出される。

### 幸田友三

すでに30年以上前のことですが、物見の岩で転落し、頂いた「山靴の音」を携えて山岳部から距離を置いていた、月日がたっても涙が止まらない辛さのために。

やがて、その時の先輩や仲間にお礼を言いたいと思いつつも年月を重ね、昭和40年代の中頃、雲取に行くため中央線の夜行に窓から乗り込めば、「幸田君か」と松本山岳会の先輩に声をかけられたり、東京で先輩や仲間に久しぶりに会うこともあれば辛さより懐かしさが心を満たしてくれた。

昨今も、自分なりにささやかに自然に接してきた、平成9年12月、部誌編集の知らせを受け、ジーンときた。そして、20~30歳若返った。貴重な紙面を借りて昔のお礼を申し上げます。ありがとうございます。元気です。

後文略

### 上条章栄

もうかれこれ10数年前のことになるが、当時の職場の定期健康診断で心電図の異常を指摘された。面接した医師曰く「若いころ何か心臓の病気をしましたか?」。その瞬間、忘却の彼方に追いやられていた大学時代の記憶が次々と脳裏をかすめた。

現在ならばさしずめキムタクばかりのかっこよさを誇った望兄（望月映洲先輩）に憧れて入った山岳部であったが、新人合宿でばてばてになって心電図にやや異常があることを悟らざるを得なかったこと。その折、多くの先輩に迷惑をかけながら涸沢から横尾のBCに下った時の空がやけに青かったこと。

毛糸の赤い帽子をくれた柳沢先輩、そして望兄と同じくらいかっこよかった山形先輩を失ったこと。

「お前も俺と同じ野良犬なんだから望月のような血統書付きの名犬にはなれん。諦めろ。」と変な慰め方をしてくれた福与先輩のこと。しかし、お蔭でこれまで野良犬のように力強く生きてこれたこと。

いまだに年賀状に「章ちゃん」「章ちゃん」と書いてくる藤本のこと。当時はダブルショウチャンなんて言われた事もあったが、五十路を過ぎた。お互い「ショウチャン」はもうやめようぜ。

ドクターストップもあって部活動は全う出来なかつたが、いい友、いい先輩にめぐり会えたことは何にも代えがたい私の宝です。皆様本当にありがとうございました。これからも心電図のグラフに注意しつつ頑張って参る所存です。

### 山田正弘

高校時代近くの伊吹山へスキーとか登山に行ったのが始まりで、徐々に高い山に登るようになつた。日本アルプスも信州にいた頃に登り、その後、インドヒマラヤへと足を延ばした。

最近は、スキーも登山も行つていませんが、時間ができたら、できる範囲で始めてみようかと思っております。

O B会にもなかなか出席できず残念ですが、皆様も、いつまでも元気で山を自然を愛して下さい。

### 金子鉄男

一昨年、松本・伊那の山岳部O Bが中心となる信大学士山岳会のヒマラヤ遠征メンバーとして、マナスルの北筋に位置する未踏峰のラトナチュリ（7035m）の山行に参画し51才にして初めてのヒマラヤを経験でき、又、頂に立つことができました。同行の長野O Bとして野村昌男さんが総隊長として同じく登頂しておられます。

私の学生時代には、前穂高東壁での加藤一作君（同期）の遭難事故があり、卒業後も年若く逝去した彼に、自分達は仕事・家庭と生きているのに申し訳ないという気持ちが付きまとつていました。

40才を過ぎて、再び登山活動を再開したのは、子供の成長に目鼻がつき、仕事面でも多少の我ままが許される環境になったからできたのですが…。

学生時代の山行のトレースを行い、若い学士山岳会員との交流が深まるにつれ、夢にも考えなかつたヒマラヤの道がみえてきました。ラトナチュリの山頂で「山も再開したし、一作の行きたがつたヒマラヤにも來たので、一作も喜んでくれているな！」と自問したとき長年のつかえがなくなりました。今後は無理せずマイペースで登山を楽しむつもりです。

# 信 稜 会 会 員 名 簿

入学年度	氏 名	郵便番号	住 所	電話番号	備考
24教	小柳津次清	399-0024	松本市大字寿小赤667	0263-58-8540	
25教	大村 昌也				
26教	高柳 昭次				
26教	閔 義臣	399-7101	(故人) 東筑摩郡明科町東川手774-1		(慶子)
26教	上嶋 隆夫	390-1701	南安曇郡梓川村倭298	0263-78-2530	
26教	百瀬 斐敏	390-0312	松本市岡田松岡51	0263-46-0040	
26教	樋口 吉弘				
27教	中島 福男	385-0000	佐久市中央区北3135-4	0267-62-4615	
27教	帯川(三浦)文子	391-0003	茅野市本町東9-3	0266-76-6467	
28教	田島 守	381-0054	長野市浅川2-100-279	026-241-5663	
28教	坂井 靖	381-1226	長野市松代町松代温泉158-3	026-278-6516	
28教	浅野井 哲	152-0003	東京都目黒区碑文谷2-19-2	03-3712-1432	
28教	百瀬(柳沢)澄子	253-0023	神奈川県茅ヶ崎市美住町9-36	0467-86-7551	
28教	和田(中条)嘉代子	381-0051	長野市若槻園地1-366	026-244-4745	
28教	丸山 静野				
28教	渡辺 糸枝				
28教	清水 忠治				
29教	吉沢 健	399-2221	飯田市龍江28-1	0265-26-9164	
29工	久保田 寛	480-0144	愛知県丹羽郡大口町下小口3-178-1	0587-95-2997	
29教	水科 信	381-2234	(故人) 長野市川中島町今里300-44	026-285-3745	(澄子)
29教	田中 哲夫	396-0621	伊那市富県9802-3	0265-78-3242	
29教	杏掛(長門)経子	386-1103	上田市神畑177-4	0268-22-4434	
29教	曾根原(大西)久子	390-0221	松本市里山辺小松町3926-6	0263-35-7666	
30工	小林 盛男	277-0843	千葉県柏市明原1-4-14柏コーポラス509	0471-44-6352	
30教	滝沢(河口)歌子	389-0603	埴科郡坂城町中之条771	0268-82-3898	
30教	塙田(宮本)幸子	387-0007	更埴市屋代749-1	026-274-0142	
30教	坂西(高山)澄子	381-0102	長野市若穂保科4604-2	026-282-4073	
30教	小田切(松本)きく子	381-0034	長野市高田川端778-5	026-227-3581	
30教	芝田(平林)俊子	381-2224	長野市川中島町原1261	026-292-5829	
30教	宮坂 昭吉	391-0012	茅野市金沢790-9	0266-72-0208	
30教	田中 賢一	390-0312	松本市岡田松岡321	0263-46-2057	
31教	矢嶋(大森)晋	384-0028	小諸市田町乙597-1	0267-23-6790	

31工	越田 寛	672-8079	兵庫県姫路市飾磨区今在家1052-3	0792-35-4762	
31教	柳沢(宮下) 常子	387-0024	更埴市桑原1569	026-274-1162	
31工	中田 邦夫	734-0063	(故人) 広島市南区向洋大原町18-5	0822-81-9727	(和恵)
31工	宮尾 裕	350-0314	埼玉県比企郡鳩山町楓が丘2-24-9	0492-96-3778	
31教	饗場 邦光	191-0041	東京都日野市南平9-5-8	0245-91-4801	
31教	池田 孝雄	381-0043	長野市吉田2-30-17	026-241-7157	
31工	小野山 尚	239-0802	神奈川県横須賀市馬堀町3-27	0468-42-8370	
31工	遠藤 英男	115-0043	東京都北区神谷町3-16-4都営神谷3丁目アパート4-1202		
32教	柳沢 勝輔	386-2201	小県郡真田町長7591	0268-72-3757	
32教	蒔田 修	381-1222	長野市松代町豊栄5014-3	026-278-1055	
32教	上原(町田)金四郎	385-0026	佐久市大字常田258	0267-67-0329	
32教	中沢 俊夫		(故人)		
32教	祢津 直行	386-0011	上田市中央北3-3-8	0268-23-1937	
32教	丸山 孝	389-0518	小県郡東部町本海野155	0268-36-3793	
32教	中村 和美	158-0091	東京都世田谷区中町5-18-4	03-3701-6435	
32教	丑山(大塚) 寿子	228-0803	神奈川県相模原市相模大野2-5-24	0427-47-1155	
32教	吉沢(宮本) 範子	381-2244	長野市三本柳西3-52	026-285-2057	
32工	戸沢 義久	239-0844	神奈川県横須賀市岩戸3-10-8	0468-49-1459	
32工	小野 義郎	239-0842	神奈川県横須賀市長沢1941-10	0468-49-2785	
32工	片岡 格		(故人) 仙台市若林区一本杉町1-2 聖ウルトゥ修道院		(八重子)
32工	宮島 卓浪	390-0303	松本市浅間温泉3-32-4	0263-46-4520	
32教	北島(吉沢) 信平	387-0013	更埴市小島3069-11	026-272-1299	
32教	清水(寺田) 結	391-0104	諏訪郡原村払沢5770	0266-79-4723	
32教	竹内 利夫	389-0601	埴科郡坂城町坂城9491	0268-82-3022	
32教	茅野 靖夫	399-0211	諏訪郡富士見町富士見2847	0266-62-5871	
32教	片岡八千代				
33教	大西 道夫	389-0515	小県郡東部町常田360-8	0268-64-2108	
33工	新名 一英		南安曇郡豊科町豊科1152-11	0263-73-9617	
33教	滝沢(若狭) 一男	381-2235	長野市篠ノ井小松原34	026-293-3882	
33教	大井 篤	386-1546	上田市浦野21-38	0268-31-3171	
33教	阿部(栗林) 紀子	384-0613	南佐久郡佐久町高野町606-1	0267-86-2700	
33教	津金 周子		(故人)		
33教	小穴 自成		(故人)		
33教	三石 紘		(故人)		
33工	加藤 晋	228-0802	神奈川県相模原市上鶴間3026-10	0427-47-4361	

34工	中村 和夫	486-0857	愛知県春日井市浅山町4-8-41	0568-83-7589		
34教	山口 秀二	053-0821	北海道苫小牧市しらかば町3-25-18	0144-73-1503		
34教	西沢 喜由	389-0802	埴科郡戸倉町内川397	026-276-5278		
34教	藤井 哲士	399-8100	南安曇郡三郷村明盛515-11	0263-77-2874		
34教	佐藤(松橋)容子	389-1103	上水内郡豊野町蟹沢1155	026-257-3877		
34教	小島 淑江					
34工	尾形 誠也	649-6331	和歌山県那珂郡粉河町粉河			
35工	石井 一哉	333-0866	埼玉県川口市芝1-25-16	0482-66-0267		
35工	星野 安雄	278-0051	千葉県野田市七光台316-8	0471-29-7172		
35教	福与(下倉)邦夫	399-3302	下伊那郡松川町生田631	0265-36-3785		
35工	峰村 吉泰	480-1131	愛知県愛知郡長久手町長湫脇乙43	05616-2-1682		
35工	柳沢 正一	351-0115	埼玉県和光市新倉2-13-14	048-463-9455		
35工	新井陽一郎	279-0026	千葉県浦安市弁天3-2-77-1	047-381-6967		
35教	川端 三四		京都府			
35工	好川 宏次	578-0976	大阪府東大阪市西鴻池町2-3-20			
35工	井原 瞳雄	565-0821	大阪府吹田市山田東4-10-3コモンイースト301号	06-878-1373		
35工	上杉 信之		大野市昭和西			
35工	守谷 恭亮	590-0503	大阪府泉南市新家1315-28			
35	玉井 洋明					
36工	野村 昌男	787-1103	高知県中村市板の川404	0880-34-0151		
36工	忠地 文昭	187-0043	東京都小平市学園東町2-1-15-301	0423-45-7765		
36教	秋元 一浩	305-0046	茨城県つくば市東2-23-6	0298-52-7134		
36教	秋元(中村)元子		同上			
36工	柳沢 進		(故人)			
36教	清水 輝夫					
36教	風間(井原)松美	242-0003	神奈川県大和市林間2-6-50	0462-76-6046		
36教	浅原(玉井)雅子	399-6461	塩尻市宗賀2315	0263-52-5233		
36教	市川 幸一		茅野市米沢朝倉山山麓	0266-72-8941		
36工	尾和 剛一					
36教	岡村 知彦	384-0091	小諸市御影新田2494-6	0267-23-1453		
36工	船本 英幸	569-0854	大阪府高槻市西町29-25	0726-96-7240		
36教	柴田 哲也	399-0021	松本市寿豊丘1349-24	0263-58-6585		
36工	浦 正直	276-0028	八千代市村上1113-1村上団地2-1-103			
36教	近藤 恒昭	387-0023	更埴市八幡2236-1	026-274-2092		
		396-0305	上伊那郡高遠長藤4410(現住所)	0265-96-2114		
37教	堀内 芳次	399-7402	東筑摩郡四賀村会田185	0263-64-3676		

37教	野口 忠世	390-0851	松本市島内4597-33	0263-47-9366
37教	山岸(荒井)多美子	950-2002	新潟市青山四丁目1-41	0252-67-1668
37工	駒井 浩	658-0072	神戸市東灘区岡本4-9-30-210	078-412-9587
37工	水野 明生	474-002	愛知県大府市桃山町1-5-7	0562-46-4159
37工	金井 光一	223-0063	横浜市港北区高田町1561-31	045-544-4191
37工	山形 文武		(故人)	
37工	荒川信二郎	960-0464	福島県伊達郡伊達町南堀20-3	
37教	下川路(川本)美知代	669-1322	兵庫県三田市すずか町台1-2-1	
37工	比多井 広			
37工	守谷 亮祐			
37	清水 洋一			
37教	清水(中村)順子	389-1105	上水内郡豊野町豊野902	026-257-2577
37教	湯本(中村)陸奥	381-0405	下高井郡山ノ内町夜間瀬2781-1	0269-33-5307
38教	望月 映洲	399-8205	南安曇郡豊科町4211-10	0263-72-8289
38工	宇都宮昭義	981-3122	仙台市泉区加茂1-25-4	022-377-4592
38工	聖成 秀次		上高井郡高山村高井4552-10	026-248-8624
38教	小川原五郎		(故人)	
38工	笠原 正俊			
工	幸田 友三	270-0235	千葉県野田市尾崎372-2	0471-27-2267
		950-0088	(現住所) 新潟市河渡新町2-4-4 R C 104	025-271-0328
39教	藤本 正二	399-8602	北安曇郡池田町染6124-158	0261-62-0322
39工	佐藤 邦彦	963-8851	福島県郡山市開成5-26-13	0249-33-0358
39工	小林 元紀	507-0072	岐阜県多治見市明和町2-22-140	0572-27-6781
39工	向後 利彦	181-0014	東京都三鷹市野崎3-17-17	0422-32-8834
39教	上条 章栄	187-0011	東京都小平市鈴木町1-72-1-701	0423-43-5201
39工	植田 徳昭		(故人)	
39工	青木 敬雄			
40教	吉安 尚夫	350-0436	埼玉県入間郡毛呂山町川角118-23	0492-94-6978
40教	市野 史朗	255-0024	横浜市青葉区市ヶ尾町512-9	045-974-3544
40工	加藤 一作		(故人)	
40工	山田 正弘	500-8405	岐阜市生田町17-3	058-273-1017
40工	吉野 英夫	264-0002	千葉市美浜区打瀬2-3-2-318	043-211-0548
40教	金井(西山)治代	223-0068	横浜市港北区高田町1561-31	045-544-4191
40工	八木 国久	399-4511	上伊那郡南箕輪村沢尻9558-1	
40工	金子 鉄男	572-0089	大阪府寝屋川市香里西元町11-17	0720-34-1691
40工	橋本 章	731-6135	広島市安佐南区長東4-6-17	082-237-3991
	西村 匡夫			

## 編集後記

2年以上かけて取り組んできた信州大学長野山岳部の部誌「信稜」がようやく完成し、各位のお手許に届けることができる運びとなったことを編集に携わった一人として率直に喜びたい。また、いろいろな面でご協力ご支援ご助力いただいた方々に心より御礼を申し上げたい。

部誌を発行しようと呼びかけたとき、「いまさらなにを」「なんのために」などなどの声が聞こえてきた。考えてみれば尤もな話と思う。膨大な時間と労力をかけた上に経済面の負担も少くないとなれば発刊の意義を考え二の足を踏むのは当然であろう。しかし、多少の困難はあってもなんとか発行しようという熱意をもった方に後押しされたかたちで完成した。その熱意を引き出したのは故中沢俊夫君はじめ亡くなられた方々の見えない力だったと思えてならない。

実は、34年前の昭和38年、故中沢俊夫君が山岳部の山行記録を整理し「部誌」を発行したいと相談にきた。そこで、当時の信稜の会員に図って編集することに決め、当面連絡に都合の良い松本に住んでいた私が事務局を引き受けることになった。まず、中沢君が資料と原稿を送ってき、幾人かの方からも原稿が届いた。その時点で編集すれば「10年誌」として完成したはずであった。編集委員会を持とうと話し合った乗鞍での信稜会総会の翌日、中沢君は不帰の客となった。私達はこの衝撃からなかなか立ち上がれなかつた。また、彼の追悼集等は出せない客観的な事情もあった。彼の原稿を入れた小さなダンボール箱は転任の度に貴重品と共に移動してきた。このダンボールを目にする度に私の胸は痛んだ。彼との約束を果たさねばと思いつつここまでできてしまったのだ。

編集の方針として、部が信大山岳会として一本化するまでの14年間の記録を中心として初代部長の故清水部長はじめ故人になられた部員の追悼を載せる事とした。集まっていた原稿を整えるのはさほど困難ではなかったが、30年前の記録を探し整理するのは容易なことではなかった。加えてそのころ現役で活躍した方々は、現在社会の中核として公私共に非常に多忙な日々を過ごしておられ、時間を生み出すのに大変苦労された。その御苦労に改めて感謝申し上げたい。年度毎に決めたページ数は大幅に変更した。年度を追うごとに山行が多くなり、他方面に及び、規模等も多様になっていき部活動は発展して行ったからである。したがって、年度により記録の記述は異なり写真・図版等も多い年度とほとんど無い年度がある。そういうことも含め執筆者の記述を尊重した。基準を大事に書かれた年

度と思い入れを切れない年度もあるが、それぞれ個性として受け止めていただきたい。そのためページ数は当初の計画より大幅に伸びてしまった。編集者の見通しの不十分をお詫びしたい。追悼の部についても、既に「追悼集」が出されている方と出されていない方があり、執筆依頼に迷う面もあったし、依頼された方に戸惑いもあったのではないかと思う。幾人かの追悼文が載った方と一人の追悼文という方もあるが、精一杯努力した末なのでご了解いただきたい。この部誌が今後に生かされることを願って消息欄と住所録を載せた。消息欄は原則として本文に寄稿されなかった方とした。住所変更などで連絡がとれなかったり、お知らせが遅れた方もいたが、併せてご了解いただきたい。

首都圏や中京圏から駆け付け、編集に参加された方々、執筆下さった方々、原稿をワープロで打って下さり陰で頑張って下さった方々、写真・カットなどでご協力下さった方々に心より御礼申し上げたい。最後に何度も原稿を差し替えたり、挿入したりと面倒なことをお願いしたにも拘わらず快く引き受けて下さった新陽堂松村社長に御礼を申し上げ編集後記とする。

(田島 守)

## 信州大学山岳部 部誌「信稜」

平成10年5月10日 印刷  
平成10年5月16日 発行

編集者 信州大学長野山岳部部誌編集委員会

発行者 信州大学長野山岳部部誌編集委員会

事務局代表

〒381-0054 長野市浅川2-100-279

田島 守  
(TEL 026-241-5663)

印刷所 有限会社 新陽堂

長野市大字鶴賀 259-1 太田ビル3F

(TEL 026-226-6317)

---